養生教訓
醫者談義

全部四冊
見料三分
百二十丁

十武9
645

寛政七改

但州 湯嶋 中屋甚左衛門

養生教訓 醫者談義序

近ごろはやるハ物知の藥師(くすし)なり
扱まう人ハ物よまぬ人も讀し内
物よまる人ぞよみもしける掛礼も
席ごとも前文包まの傳くもハ究尓(くつ)く
兔(?)彭若(わか)ひ彭まりい斎(さい)藤(とう)別(べつ)當(とう)

但州 湯嶋 中屋甚左衛門

山

645

をはた猪手ばかりなしとまでは給へる
御前書今ゆゞをかくし鯛子香ぐ
物言ふ者がなんぞ又くつ見と竈歯
と嚙ふて息絶ゆるあるやとかへり隣
手許の物知り顔なる親仁なる貴人
妻くと見ゆくとてかゞり如何何とも

せん方なく許へ頭をかなくくい
羽織に竹篦前さがり不揃く何の法
存知もなし医者坊一人引揃へく
左右の手を摑や摑子中見かり於擬
の丸粒中ちおしく咲入くまへわつと
息ありくあれ一つとのへより家内ざゞ絶

これか所謂指指手招招く八百を
いつはるかハ神農の流とくむ族なるべし

宝暦八戊寅年如月 冀得斎

醫者談義

目録

但州 湯嶋 中屋甚左衛門

一 人参好悪之談義
一 配剤大小之談義
一 加持祈祷之談義
一 病家需医之談義
一 至賤中有疏常功談義

一疱瘡神の談義
一医者發不發の談義

醫者談義巻一

人参好悪の談義

夫医者の起りハ天地ひらけて八十一万五千五百八十二年にあたる今より算て二万二千八百七十七年前にあたりて天竺震旦我朝三国の真中の東方に太昊伏羲氏といふ人ありて八卦を開き陰陽五行の道をあらはし給ふ蒼人のために易と名付て上下二巻の書とす今にいたるまで伏羲より一万七千七百八十七年にあたりて炎帝

神農氏おこりてはじめて一切草木の気味を嘗ひて
一年の日の数にあたる三百六十五種の薬味を定め
られ上中下三巻の本経本草とあらはしたまへり是
後さて又神農氏より五百年の後に黄帝有熊
氏おこり玉ひて岐伯鬼臾区等の諸臣と人身の秘
蔵五臓六腑十二経絡等の理を論じ一切諸病を治
する法を定めたまふ素問九巻霊枢九巻合して十
八巻内経とて以上三世の書と名づけて一医は三
世ならざんば用ゐずとかや又黄帝より三千

年の後今より凡千五百年の先後漢の世にあたりて
て長沙の太守張仲景といへる傷寒雑病論十六巻
をあらはし一百十三方の薬法三百九十七法の治法を定
めたまひしよりこれまで一医の道盛になりて隋唐宋
元明にいたりて医書のかずかぎりなし又牛に
汗し棟に充るといふもおろかなりさて日本
にしては大己貴命少彦名命既に神代より和流の
医法ありて和気丹波の二流近代は半井家道三
家の支流ありて盛なり然れども其支長沙のは法の上に

医家發祥をたづぬれば　天子より伝来へ施薬院使とてごさまき民病を救ひせ給ひしより え和此来は太平の御代なりけるの韃ひく童を筆拐をとりて墨すり髭生ゆる奴の角内角介をいろはしらねは稀なる世となりて衆方規矩万病回春の假名付あるをみて医者の真似する者が何の間に頭とまろめて長羽織見る内よ駕籠乗物にとび上り昼夜いそがしげなる者色り子孫乱のうちに名前しらず里く

村々に医者のなれバなし此故に療治にハひたし志く〳〵日のおい医者しよせれ経絡にハ弱ざん人おくさしゆるていとゑんでう生医師の問ぬに心く裏へ回恥なり見より志く〳〵医者のなり賣おまく稼てびなきを同しやうに畢志めるなむべなるかれ此此の医者ハ何の所存なきをなつて人参さへ用ひまハ病ハ愈るとのし数人なく外感内傷の別をなく皐嗽氣のかしまく三日とも熱ねちひけハ傷寒と内傷なりとも知やうしてや人参とさく絶への病家

を面按持ふ百日ゐふ者の妻が今日七日ふ及ぶを
少く人參を用ひて宜しかるべしと入りけるにて様
みありしハ世界ふ人參が沢山ふなしや銀が沢山
にぬしや夫人參傳を論せしハ用ひづさ用ひ魚ず
らずとの病証と明らかにし且人參ハ揺光星の精氣
志して人參となる也人に下にて人參あれバ上に常に
紫氣あり背陽向陰に生じて自然生を以て好と
も唐より渡る人參中にも上黨參をもつ上とし新
羅高麗百済是三韓よりて乃三韓合して朝鮮

と云ハ三韓の中ふても新羅を上とし高麗是に次
ぎ百済また高麗の次なり三韓より抜奥唐の北
遼にて遼東とて所あり是より出る參を遼東
參といひて朝鮮に増されて上黨に亞つぎまた朝
鮮より北に遼東にハ近くして女直とて国あり是
よりも人參を朝鮮又女直よりもとは唐の
南京に毎年二十万斤貢物として朝鮮より出す是
是を高麗人持て渡り日本にて賣來らせし唐
人參といひ又判子とも云元禄年中までハ朝鮮

むかし唐より来たる人参は皆真の物なりしかば偽
物なし。故によく〳〵つかひても人参を噛めば卒倒
したる者の面に吹かくれば忽蘇ス。又上品の人参の
煎汁を呑べき所に乱心をしさめ又人参を恐るゝ事
蛇蝎のごとし。唐なる人参の真偽を識るにはかくのご
とくなり。其三五里ばかり息つかざると言ひし正
徳年中より以来は唐も日本も人上手になりて人
参を作り出したるゆゑ夥しく出来し故に種々の似たるもの
偽贋の物出来し今の人参は口に類するものいくらもありて

てくと三町とゆるやかにして息つきぬべし。蓋唐の
一里は日本の六町なれば唐の五里は日本の三十
町なり。且又唐の独参湯は一両を以て独参湯とせ
り。唐の一両は拾匁なれば一両といふとも真の
人参拾匁をもつて独参湯とせば起死回生の功あ
るべし。然るに重き者も元気を無何有の郷に回さ
んこともあるべし。今見る所の独参湯は五分或は壱匁
或は三匁をかぎりとせり。纔に奄喘みなへるを見る。且
元文の比より広東よりて中に来れどもおほく卑賤の

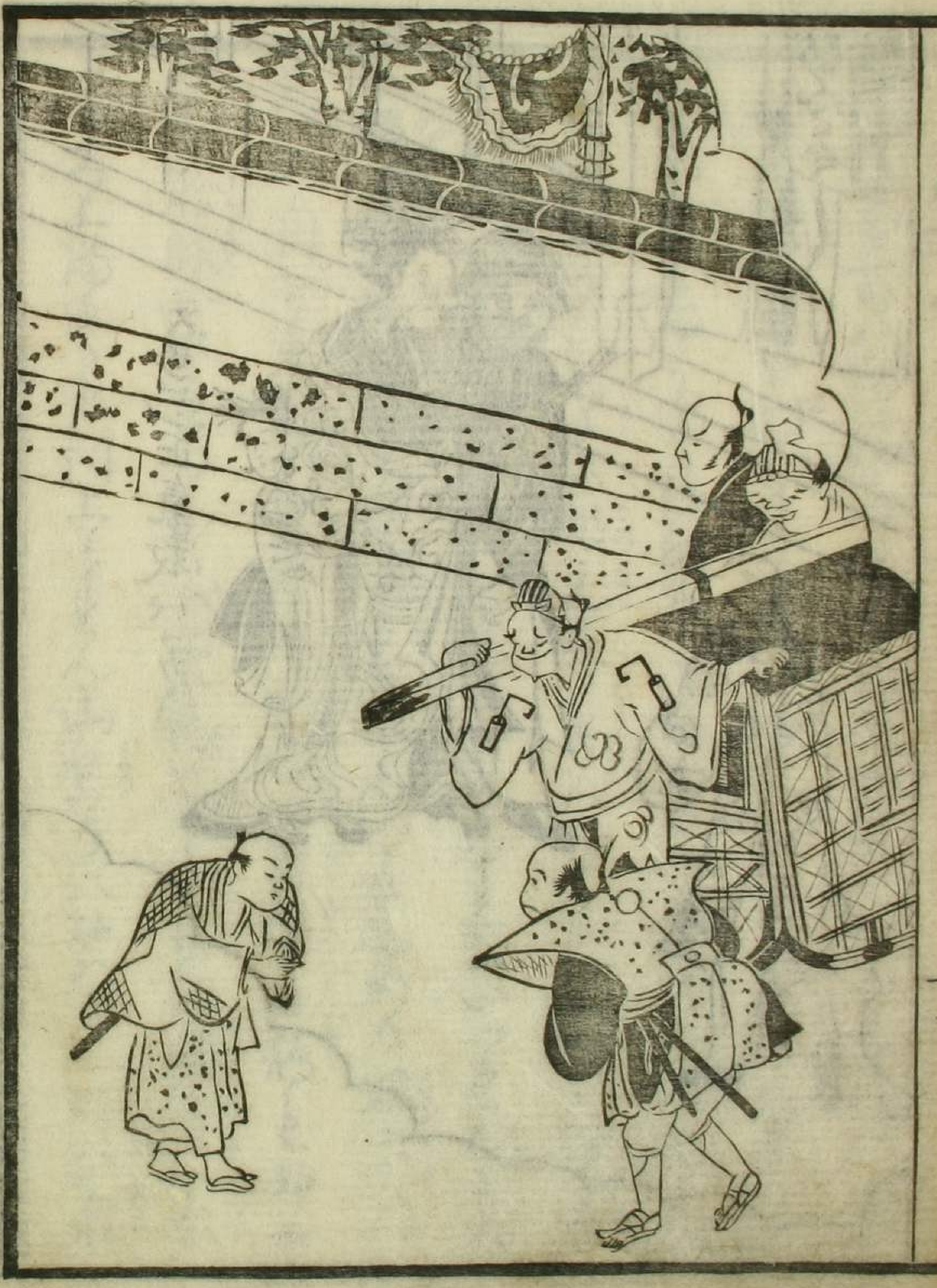
者を惑し家財を費さしむるハ人参なり人を助くるにハ
なくてハ人を死るもあり無用のものなれども遠鄙へ
ゆきてハやすきよしなり近比ハ絶て医者にも其の名
ハ白地にいふまじき陰の名ハ人参一斤をあいらうげく四枚
肩に常に薬箱持せ草履取若党なとつれて上下八人
明からさまにあるくハいしやどの薬店より安い大人
参をあげらるる病家へもてゆきて朝鮮人参り
なくあつかひてとまで薬物のつかさなひにてま
の朝鮮といふ者がくつもさく年の頃なりや室町に常に

在金子高の代くはらする者あり一人男子十八歳
陰虚火動の症みて肺火とぶうおかしく咳嗽
主備上なく賛する者ありし仲の薬物なれかに医者
ハふいのやうにあげて薬師に崇貴ひて日の始よ
り他医にみせて薬物を放さず薬物
どのも見ゑ患家の党の人のすら淋しかれにに見
なく随分見知り人参ハ我が持料を用ひべしと
例のはなし人参を一吉代金十両とかけて
又ある店の餅一服に二分宛入て一日に二服宛三年

に人参百八両錢かして六拾四貫八百目千両の餘
仕あづきりやけくらるの四貫八百目徒に皇帝て子
息の葬とやうく仕方して百ヶ日の茶湯に油揚の人
分もねせうにまてハ彼人参を一子人のもてむもつて少人云
とれむこい仕方まくて一医老を本名ハいつまぬ異名
ハ投田篭庵とよいつまぬ名人の人ふまの双六乃
さいの目をも勤がもちてし刺の亟着婆扁鵲をもよ
かども胗脉かはるりかふべ無分物ハさらく也に輿車に出家
て天上はぐくを引上てまん山あうりに也のてはお合

京 百百先生

此の者薬屋風呂屋暁屋巾着屋背小路から北側
わく随分昼夜我家に居らねあそび好の医者也
或時これや絶へば喰やむ貧しき薬罐屋なり母ひとり
まる子ひとり四十にあまれども妻もなく孝行
なして世間に知られたり母既に老病にをかされたれば
たちまちやせおとろへの看病貧しき中なれども心をつくせし仲
間の薬罐屋なれば投目ともされ付されば生れつきなる
此のふくろう三昧せられるをみるべくもしや飲べ
人の命の百年ぐらゐものもなかりくしたがはれ



ての儀く何とぞ今一たび本復(ほんぶく)いたさせられよとのこと
ゆゑに年よりての疼(えん)なれども痛(いたみ)も脾(ひ)
胃(い)のよわりなれば帰脾(きひ)湯(とう)がよからうなれども人参(にんじん)
黄芪(わうぎ)木香(もくかう)酸棗(さんそう)仁(にん)龍眼(りうがん)肉(にく)の高(かう)貴(き)の薬味(やくみ)がとつての
越(こ)されといへば決まりものの取扱(とりあつかひ)いさね
ば其所(そこ)許(もと)わたくし日綱(じゆうの)くださるべし代物(だいもつ)はそちらより
仰せくだ二十日ばかりふやくみん屋の御代くて
紀やうなく安もむなしく鳥辺(とりべ)山(やま)へやるやうにて扱て
人参代をせずなきは家(いへ)より掛(かゝ)ひやうなふしてまた

段になりては不便(ふびん)なる事なれども母の呑(のみ)こみも
しくなりて龍眼(りうがん)肉(にく)をかへてものの効(かう)能(どき)なる物
のやうに此医者のいひきかしなれば三十粒(ぶ)ばかりづつ今は
ちやうど銭(ぜに)わたして母の煎湯(ちやとう)にいたしてくれと
いつかと見れば龍眼(りうがん)核(かく)なるものよびかへて抜田(かげさ)いつ
に薬物(やくぶつ)もたねのやうなものでもつて病家(びやうか)を欺(あざむ)き龍眼
肉の肉(み)を其の身がくらひ核(さね)を病家へおくりてくれて茶に
へさせして言語(ごん)道断(どうだん)医中の横(わう)着(ちやく)者さるのくらしめ
さいや何ともなければ見んとも思へ花麗(くわれい)なる医者の中

にけふ類あるハ六十六部の中に護摩の灰あつてもし
六十六部ハ世間にかつくも幸ひあれど医者と金銀
ハ世間になくてハならぬものゝ金銀の悪きハ見わけよく
見わける医者の悪腸ハ人の目鏡にてさ見えると夏一病
家の用心あるべきてにありし考へありあり机を叩
てさはさはく讒じけるにて貧らてよりも山の祢るの
障子をもさうもしあるく又冀得の家たりがたく
の講談傍ふて逃げけれどもあくと出ものくく気が升
てうく頭痛ありと皆話ハ養生所あのさうなる講談

と聞くに内か秘しく居ることとありしてい世間に
あまくいひ色るものもあまりかくハ医者ハ見わけ
ぬぞよ夏一薬店にてまはれく通ひ流るもたくん
え緑年中の人参が今あまりに五十年以前お
の古徽さうの薬が残るがこさ其の上金銀を車に
積くともないといふのハかしくる物にぞれ外と
いふものハさ黒山坂に滑しくい梅ぼしの名を聞て
を口中に津がたまりて唾をとるはたた色しきを
ありちか切ましの親の今死なせくハ江ハいつでもん

いとしくあいらの兒が死ぬれば若ぶだぶ入らんとなす
拘攣何ぞものくるしきをみて死んが恋いかさう人は獨参湯
補薬にあらざれば勿らずとし陀羅尼んなれども人
桔梗ぐるを千太狼ぐるを見が人参と又かとび附子
ふようしく鰯の頭も信心から奇妙不思議の
効験もあるものぞうそうざやくは阿毘羅吽欠を誦が
ない一心決定しくはあぶらおけそひりしんでくるふ
いとしかくく呪し婆く病をやし何もあらぬ
がらんの人参似より人参しく気嫌ある人ぞかし

時ならぬ茶のちゃうくく去年の事を聞しうく
へは聞人がない人の目ひねしくと息筋張くつるな
あれは暗の夜の鬼面

但州 湯嶋 中屋善兵衛

医者談義巻一終

但州 湯嶋 中屋甚右衛門

但州 湯嶋 中屋甚右衛門

醫者談義巻二

配剤大小之談義

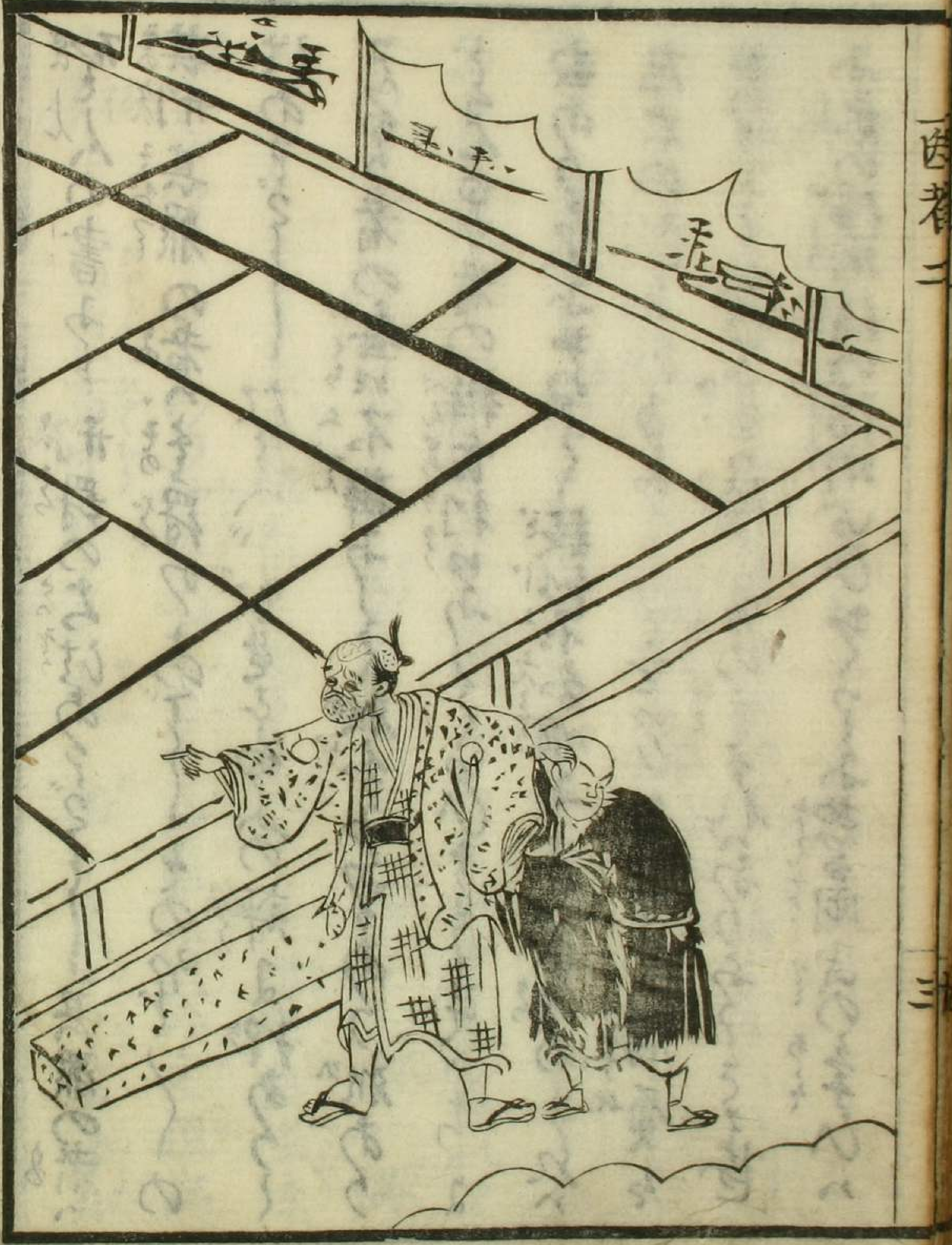
毎とし来る書生の中に嶋村蟠蔵とて揆不行
者ありそのいふて拙者此比仲景の傷寒論を
読ぬ所に桂枝湯麻黄湯の分量を見れば桂枝湯ハ
桂枝三両芍薬三両甘草二両生姜三両大棗十
二枚とこれもあり宋元以来明朝の方書にハ古への
三両ハ今の一両とあり明朝の一両ハ今の一両とも
後もハ桂枝湯の薬品の味合しく四路試そこう

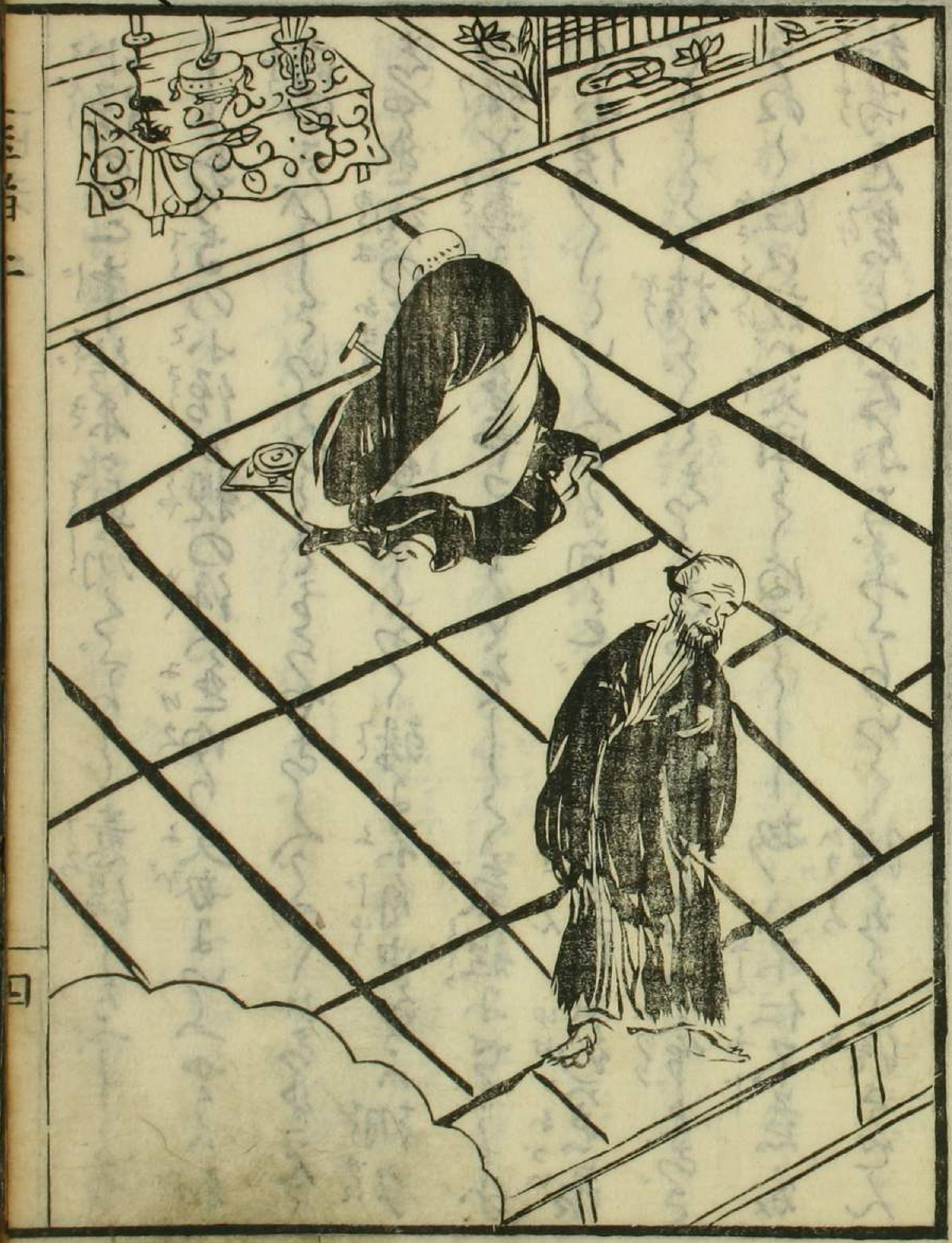
なりなば七分を以て煎じて三分となして三服と
して一服ずつして汗出づれば後服をやめよとしあり
古への一升ハ今の京升一合にて次となりぬれば七
升ハ七合にて次のなりなり薬味四拾目余あるを三合
にせんじ汁わくハあづきのごとく蜜のごとくなる
べし傷寒論にみえたる所の薬方桂枝湯麻黄湯
以下一百十二法の内湯薬の分何れも皆薬剤多く
水多し煎じ汁わくハきはめて厚濃くなるなり
強く用ひたるハ一服にして強きをなす法なりぬるに

當世のくすりハ一ふくの目方ハ壱匁より壱匁四五分
大服なるハ稍弐匁にあまれどもみづハ一合半あるひハ弐合
半にせんじて弱しく病を治するに日を経月を越ゆ
るにハ古への傷寒と今の傷寒と異なるや又唐と日本
と人物ことなるや其義くはしくハ講じて嚢錦無
浅く聞く足下ハ愚頭なれどもあらく一医家の肝門
を問ふによ内経よりして病に遠近あり説に中外あり
治に緩急ありそれとのハ之を奇とし遠き者へ
之を偶とし汗をとるにハ奇をもってせず下す

まハ偶をもつくせど上をおさなひ上を治する事ハ
制緩をもつくし下をおさめひ下を治する事ハ制
急をもつくしきしく偶奇の制其服を小にし数を多く
すへく寄偶其服を大にせ大にすれバ数をすくなくし小
なきバ数多し多なれバこれを九にし少なきバ是れを
一にし是を寄にして去ざれバ是を偶にし是を偶
にして去ざれバ反佐してこれを取る所謂寒熱温涼
反してこれにあり仲景の古方ハ医家治法の元祖病
に対して百發百中にして病を治するの大法也経バ

聖人の書にも 刑罰の古法あるべし 其罪の者へ
其刑 其罪の者ハ其罰なくのごとしその如くの
法あるべし たとへバ高きを以て下の評を聞あると
うんある者の無口不辯にして非なるある非あり
とうんある者の辯舌利口にして是ひあるにしてうちま
なありもふむかく雑の不分明にして未決のまゝれハ
左右の理を能く知りてまつしきを是ひわきて勝負を
おつくとのべて其ハ彼聞いの重なれバなりぬるさるを医
不家の信州後の防州へ是ひおくつまに熱る國民の争ひハ





小僧の二季給米ハ奉公ぐらし意得ぞろべしくは
しらる寺の小僧ハ親の許へ無心ゆけ父母にいふやうハ和
尚のきびしさいひどをりやきへてくひきませ今
志やま頭の生疵あまたしるく孫ハ不自由ある朝夕
の飯を蓋かくさせやつまりとそしらく氣短ふせられ
く小僧くしくる間をおぼされ雪隠にゆけバ無居
さらしく撲ぐてまつまやつて海をそで命をおさ
られし泣口説バ父聞てく波てしし拗く不仁不慈な
和尚見捨しハ本ふちぢつてく暇れく待させん

しらく寺へ遣ゆかれの二年一つにひもちく述懐して
きけバ和尚大にふけでんしらく先あきなる雪隠とりんやし
やきよ手ありひせよ經よありしえへバそまつく雪隠へ立る
何とさるやうしと竊のかれてハ却とひ待しく隣にとむし
ても指を折れあのでしくおがきま雪隠ふかしらく堂中に
用ふ居るやうに指傷の気んざれハ推量あきま朝夕の飯
を焼くをきけバ飯揚らしれよ杓子ふかくでんがうれ鍋釜
のふちとをふりくハ縁がんへ付でまくしかれ物る杓子
を十四五本もしらく杓子わりもやる間よハでやるりなしに

飯椀の蓋をかぶりて門に立せまゐらせ頭をとらせよといへば髪抑し
もしくは月に一度を押へしとして剃侍らせまいらせ孫
侍らるく是非なく剃刀庇が之ませぬまで子息
おぞましども何くともなくねあんぐく者なれども愚僧が身
なにいふしたればば不便に存年たけ成長せしさふらく
なんとぶんしさうしくそぞく侍さとし滅却しらく
侍ろ主人へ父けりさあらく小僧がにくた太ちびひさけるか
くしく侮りしにて世俗の諺に和尚が和尚なればに小
僧が小僧といふ何ね問答をいましやうら古る事なり経木が

奥州くだりハ義経ハ都より舟路よりくらましに大物の
浦にて悪風にあひ小國越に奥州へ三十餘日で着せら
れしに経木ハ纔か志まいしく京から奥くへの拍子心合
せまで町とに遅滞遅留しく東海道を七十五日かく
かくて奥州に行くさしてならず是非月日を経て善悪乃
表裏と関定むるの法なり又防州の封界に石地蔵の本
綿をぬすまれしと町内数月の詮義に困窮して終に盗人
あらはれしハ遷延と日数を經しゆへなれども盗賊と
もさまでなり醫の治法をいさ仲景の立法ハ大法なり

凡傷寒の似たる者二十四病あり六經の傳變を太陽
陽明少陽太陰少陰厥陰の六經に渉るに傳并順經
越經誤下表裏首尾の次第あり經病府病併病合病
壊病の分別あり汗するには早さをいとへども甚だ早さ
をいましめ下すには遅きをいとへども甚だ遅きをいましむ
かりまた桂枝咽喉にくだりて陽盛なるは斃れ承氣胃に入りて
陰盛なるは亡ぶといましめあり然るゆへに西晉以後隋唐
宋元明に至るまで仲景の立方を説にまかせて家々
種々の變方をたてて服を少なくし日数をのばする医

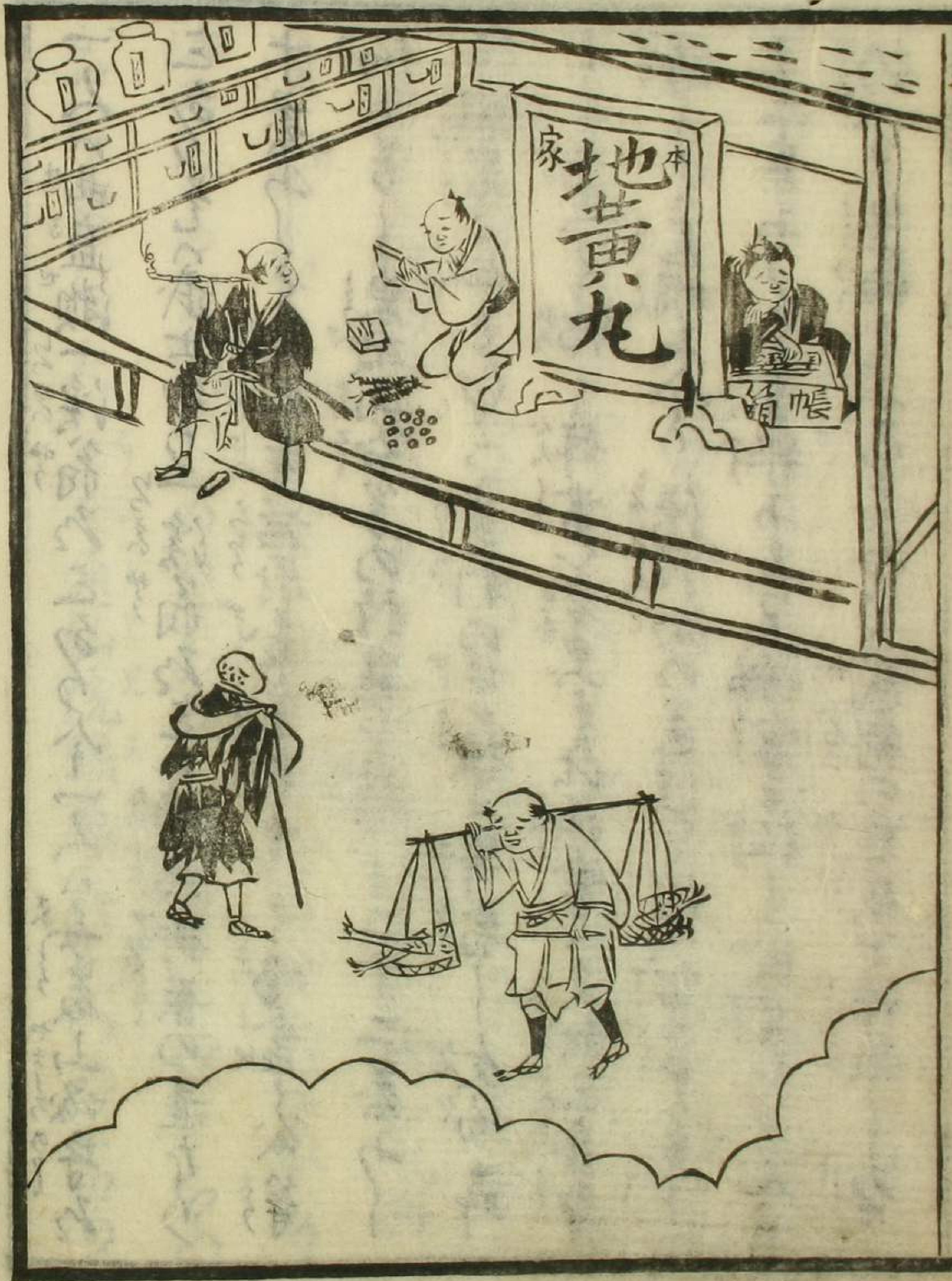
家の秘方なる明の王時勉が常勲の徐氏が中気不足の
症を療ぜしときがへて久しくある不足虚分の症を補ふ
日数を積みて治を緩くするにはあらじ家産を建るが
ごとし不日急速にはなるべからずとてひそかに百日を限り
て治療するに十日ばかりになりて何の志るしをもみざれ
ば徐氏性急にして医を更へて利気のくすりを用ひし
に甚だしくなりければまたゆるゆる時勉にあやまりきて終
に三月余になりて本復平愈せしとなん傳記に載せて
あるなり医の日数を経る説とせり又効を急ぐ人を促

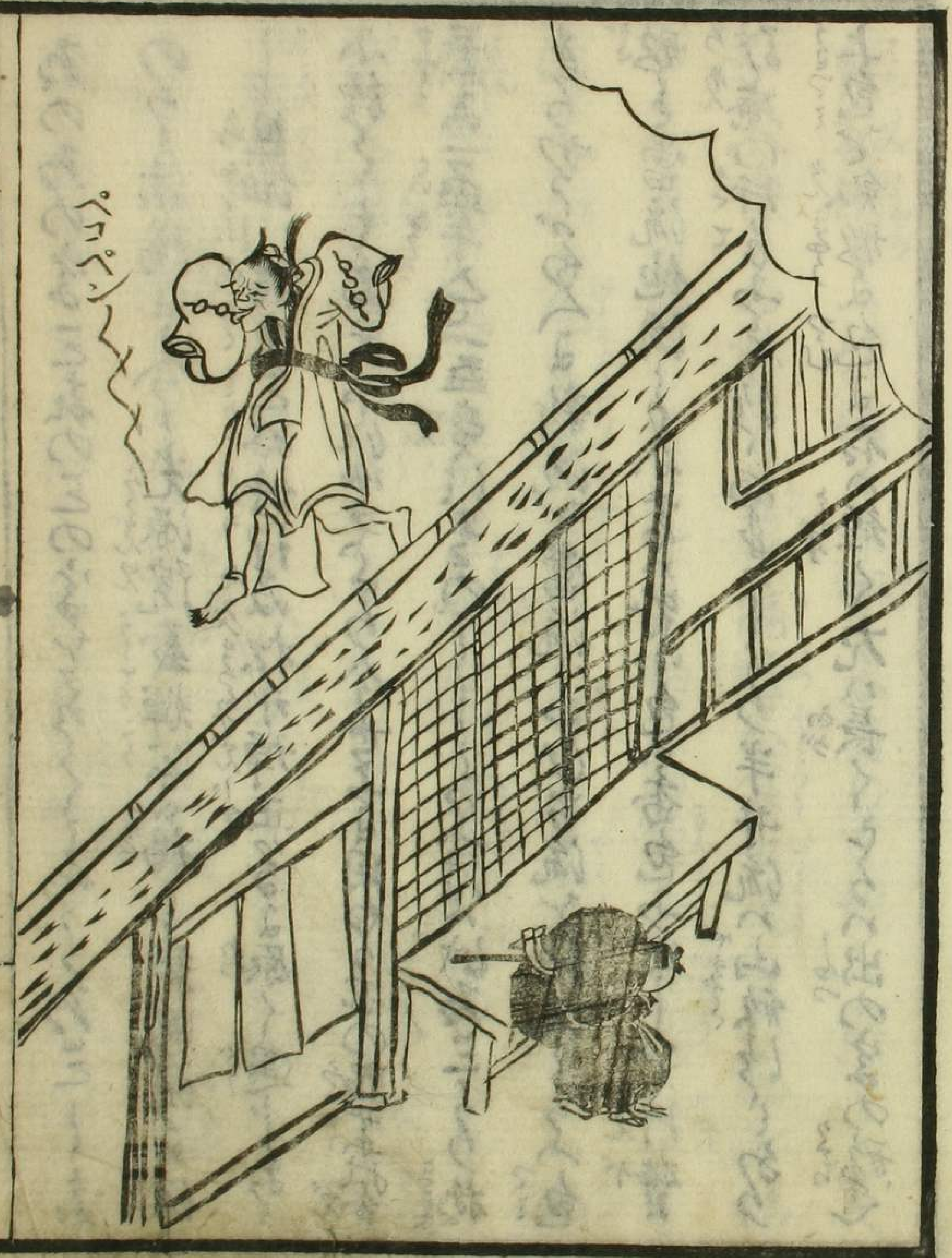
し讒擿には六朝のとき梁の太僕射范雲九錫乃命
あらんとする折ふし范雲傷寒を病けり名医徐文伯
を邀へてきたりてありけるに何とぞ此病を愈してお
らんや此度此錫命にあづからずば一生此官にてをはらさ
ししとなげく文伯のいはく病を愈すことはいとやすし
今日明日に愈さんとすれば恐らくは二年の後なから
ん范雲がいはく朝に道を聞て夕に死すともと
可なり況や二年をやまたで治しられといへと
文伯やむことを得ずして地を焼て桃の葉を敷て其上に

に朝には補中益気湯夕には地黄丸とかやうの荒淫
の者皆是に依て補薬を用ひしを薬いらぬ用
ひぐらしと地黄益気湯とくこと無るにて用ゆれば暗に
害あるなり近世の学者は多く薛氏によりて是より
寄て医学をなすに至て術を守る一渓翁道三は術精
して学は今の医に劣れども寄て和学は和学を皆ける
にをさまらぬ三の医家の堂上方にありし寿とと
見し時に皆仮名書手あれて婦人女子のようやすく病家
看病に便ありて門人にもさへ書を全九集は仮名これ

なり今時の医は文学と云ものにて道三の切紙全九集は
まれにもしらず唐宋諸家の大部の書をよむ事を要と
決して見れども病人に施ではきかざれば叔和が脈意には暗から
ずして指下に明らかならずしては此故に須年の医者は新古
の流義あることを志てなるもの多し古流といふは大己貴命より
伝りて和気丹波の二流百王百代相続して近代和気丹
波一家と成て半井家と称す新流といふは道三家なり
此道三といふは信長公の時代なり天下に道三といふ
名三人あり一人は半井通仙院驢庵五代前の道三なり

一人は曲直瀬一渓翁道三なり今一人は松永山城守道
三なり是は武士なり一渓翁道三は洛陽柳原の産なり
十歳にして相国寺蔵主集行に入て喝食となる等
伯と号し東坡山谷等の詩集を誦じ二十二歳にし
て関東に赴きて足利の学校に寄宿し文伯に随
し事へて博く群書を学び其後鎌倉に古河の三喜翁道
通とて大明に入て張月湖の医法を伝へ留学すること
十二年にして本邦に帰りて鎌倉に住し医業をさかんに
弘へてる名有に志て学びて医術の奥儀を伝授し等


本家
地黄丸
帳箱


ペコペン

これの字三巻の三の字をくづしたるなりここに名
のは洛陽にて光源院義輝公に謁し寵遇殊に渥
し因細川勝元三好修理及松永弾正等に厚く遇じて
小路とて名天下に噪しく今世上に用ゆる所の服薬の分
量は一匙半合て一盃煎法をのぶしるし又法は此三より起
りかのが多人に新流を當流とよび古流を他流とよぶ包
形も當流他流よりは小なるは皆小包の香包にせしを片臂
路庵の行脚よりはじめしより半井流は山形にたゝむ
上包を鉤形に包み右は短く左は長くとる是は出の字の形也

發散催生一切病を去るゆゑに小児は左短く右長くと
なり又ハ内の字の形なり是胃膈噎不食虫積等の病を治
するに小児は惣じて一匙薬は病家の禁忌殺表をゆるして
治すべきなり凡薬に甘草の入ハ峻なる薬味のあるに和
緩なるし先んじてなるなり生姜の入ハ表達子用のゆゑなり
棗の入ハ脾氣を助養するがためなり此三の撮甘中行生姜
一粒棗とつハ甘草多ければ和し過して餘薬のちから
うすし生姜多ければ逆上の害あり棗多ければ胸膈不
懣く不食さるそしあまればなり薬の指すも麻豆のごとし

しハ麻ハあさだ豆ハあづきなり薬のはぶの大なれ
さ麻ぐ豆小豆のことくなり粗なれど細なれど中庸の刻ミ
ぐんき古流の法なり古流ハ細末と用ゆるなり独りも如き
煩ハ薬品の鈍色と好ぐ角もしらぬハまさりハ病家に徳く
煎湯ハ粗なれバ薬汁うすくし薄なれバ薬力弱し細なれ
バ薬汁濃濃なきバ胸膈に停滞と故にあつくむどう次
うくむとさきに中庸と用ゆ盞の加減のことを代宗え
明らかなまる方書に或ハ一鍾あるいハ一盞しある鍾も
盞と觴のことなりひくれくらしさと盃といふ流なりて

ふられと盞といふハ方書に只一鍾一盞とあるハ何れどの
觴なりと測ぐべし己に三の切紙に一番ニ天目に一ツ半入て
一ツにせんじ二番ハ一ツ入て半にせんじとあり此天目と
いふものむかし高麗の天目山にて焼し茶わんゆゑ其き
のと大小ありといへども大やう六八十目入を正となり八
十目ハ延胡の半分なり明の一斤ハ百六十目なりこれを広
秤といひ又大秤といふハ半斤と半秤といひ小秤といふ
故に今ハ半秤を用ゆ天目に一盃ハ京升に二合入京升一
合に今清上なるとの四十目入るに独きバ一天目に一杯余ハ

又同百二十目京升に二合入なり天目とハ大葉ぎんの
お許なりけんといふハ飯器なり字撓なり今茶わんといふハ
挑なり茶盞なり故に方書に白茶盞と往々にあり然
しるに當家の配剤の服量弐匁五分をもちひるときハ両
の四分の一にて廣稱の四分の三と配合をかんがへよ紫
蘇薄荷猴葉の薬ハ服ぐさ大なり當飯地黄土瓜の入
薬ハ服ぐさ小なり然ればとて煎じてあぢはひ等なり
独ろふ在弁清ヶ焼の茶盞小さくやうく京升に
一合入ちかきに準じて薬をも少服になりしかバ病人の平愈

手こくあり依りて病家の謝礼も少々哉禮銀

但州 中屋甚左衛門 湯嶋

医者談義巻二終

養生教訓

醫者談義

三

但州
山崎屋
湯嶋

醫者談義巻二

加持祈祷の談義

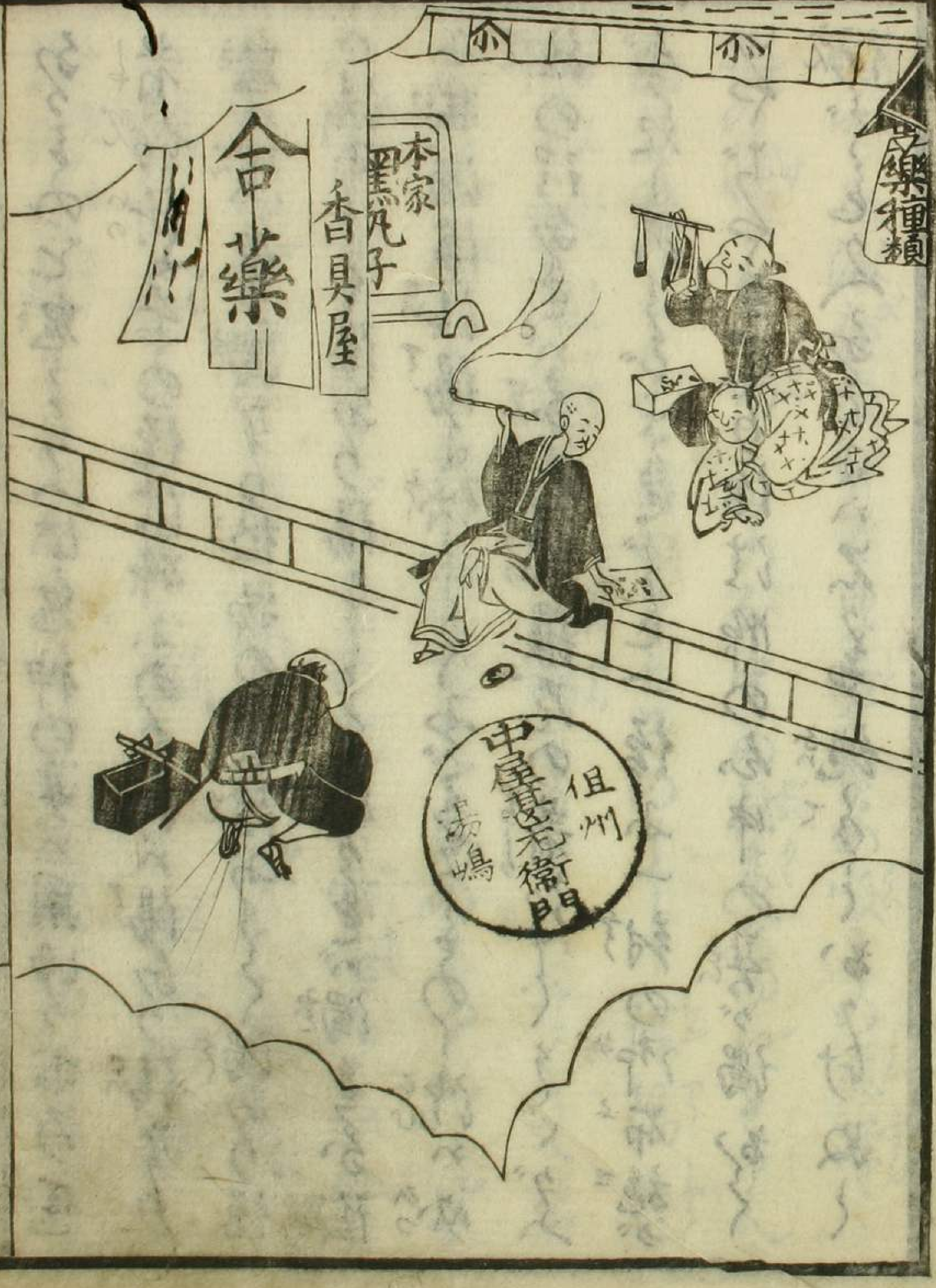
諸生の内に一人いひけるハ只今爰許へ来かゝるに或病家より日蓮宗の僧徒多く並居て読経をしてござれど扨ハ病人埒明ずやしかし人へきくにハあちらで血狂の病人と物の怪なとゝいひて巻陀羅尼を呉口音に呉音鄭声青ならぬ声を張上て町内をひゞくばかりにおひたゝり何も血狂の病人と物の怪にして

祈も加持しても治する理とはいやしく同じきハ糞
淨穢せず嫌ハで穢物の怪我をせよ血狂をも
せよ祈を加持しても治せさるに強あるして皆陰
陽動静二儀の妙用なり儒者の云ふ祈も天地を祭
る医家の精神変気の法あるも同じ　法生いづく
法をバ佛法の地獄極楽の沙汰とも云ひ語ふ及びや
云ひて佛法のするは書席に入れて論するべし　礼儀
のするは儒学者に問ふべし　我医にハ鄙にするなり
拯ハ一向に貪着ぐさざ我医者ハ陰陽二儀の妙

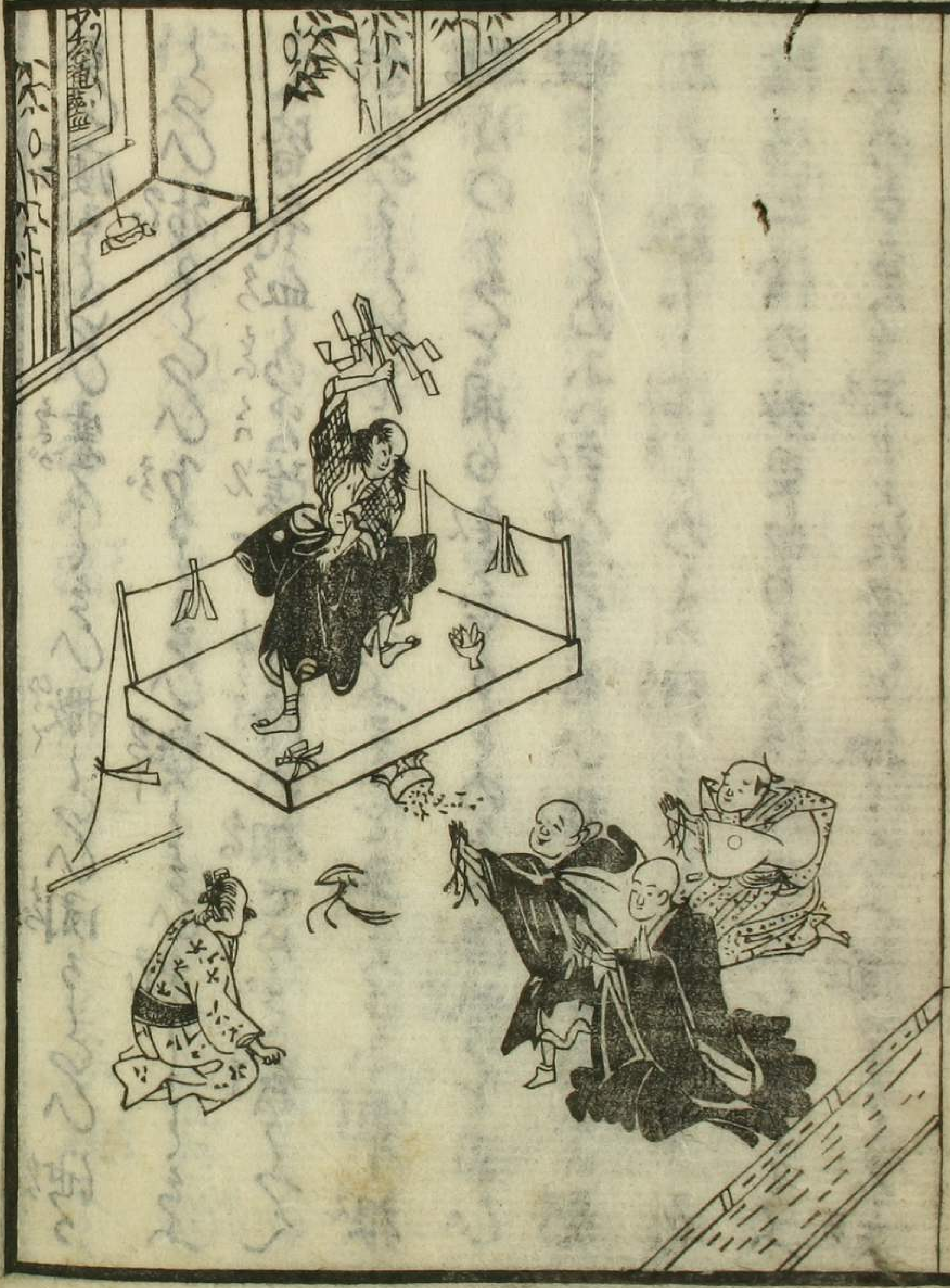
用なるふして上なるさハ天より下ありて底なるさハ地
法まさバ上なるさ上して鳥ぬるふ地より底なる底
と探るふ地ふぐまと天地一太極の内ふありてして
しぬ夫太極ハ太ふありてハ天地小ふしてハ毛微
塵のうちふ陰陽の二儀極まり故ふ太極とさふ
今ゆる所の天台真言の大般若日蓮浄土乃題
目責念佛ハ戦場の鬨声陣貝のひびきふ歓の恐
退くハ陽動陰静の相せめぐふ同じ真言宗乃
印相ハ嘻聲の指摩ふ似てり唖聾ハ手持様とし

て来るなどと天台真言の佛ハ絵像木像に秘ん
気を移して指を曲手を叩く理をさとるを
陰陽動静の二儀なるぞや我医師の書素問に
移精変気の法あるハ伏羲より前の人たちハ穴に
住木の上ふを巣として動じてハ寒を去のさ静に
居るくハ暑を凌ぐしなる冬天にハ走りて
汗をながして寒を凌ぎ極暑にハ木陰に静まり
伏まるく暑を凌ぐ是よりしく移精変気の術
ありん人の病ぞある所の痛としひ痒しとしひ腫るく

といひ痩るといひ塞るといひ撒といひ閉るといひ泄る
といひ卧るといひ下るといひ熱といひ寒しといふ
是皆気血のなす陰陽升降の相せめぎ戦ふて
発るなりこれを天るよしなりを平ぐるに草根
樹皮の薬を用ひ寒ずるものにハ温熱を用ひ
熱するものにハ寒涼を用ひ鬱するものにハ灸
灸して蒸じ滞るものにハ針して他ぐらす是
陰陽二儀の妙用なり夫陰陽の気を是とし
気のとれる正しき者を神として濁りて不正



但州 湯嶋



なるものと鬼といふ此鬼神の義は聞ゆる所の医
者坊祈るもの僧法師にあり神は陽にて清なり
鬼は陰なり濁なり彼物の怪は陰にして濁なり僧
は清にして陽なり陽をもつて清なれば濁なる陰
に勝濁陰清陽に伏してふしぎなるものは必
然の理なれば千巻陀羅尼の著しるしくもなく
なれどもあらざれども一僧に一封の御布施が
いやがうへに僧法師の心中の慾が濁なく
悦びもつ人なきには不の事縄手とおりけぬと

胸中に海老のむきみ章魚の吸ひつき飛躍
物の怪なりは坊主の心中の材木が淋れてまるらん
医者のくすりと用ゆるときのすし陰陽升
降寒熱温涼の理を明弁するにはなくて古
人の施治をやらる薬方と何の事なく知らず
に向て合ふあくびの業あるときは呼吸のくひ合せ
多くは道路のちがひにて空焉胗脉するふを指下に
と慈みはせるが心中に治すく雑談接摋に
浮沈遅数をうられまへざれは常に陰陽不和の

理をしられ未人ざりがいても平なり加持祈祷ハ効
なりとハいへども害なし一医業の誤ハあしとあまた
不仁の命を云所に殺をおそろしきハ不学の
医者のくせなり　諸生のいつて加持祈祷ハ害
なしといへども女の嫉妬の祈りを丑乃時詣
をして神木に針をうつありこれを強現すしくるを
病し死るもの多くハ詛殺されしといふハ如何　糞
得無なりとしるしていふ人もあるものなりその夜
更くなし元来女のもつるさとまされ卦木ふ

針うちくぎをうつてとたのむものゝへいども木魂いかで
こたふべきまづもつて彼當人のにくしとおもふもの也本
に針をうちまいなれどもおもつてみへても却て其人に
仇をなすべしこれを還着於本人といふ医ハやくを
たすけ人ハ木の不詑るくふを害をもつてあり元文
のはじめや江戸本丁筋の裏店に家主ある一
人の娘を持たりけるが美色なる店子のうち
ありけるを萬にひいきにして芝筋の
菓種屋の富家より嫁をもらふて主とせんと旅

料(れう)とられし近月何時に嫁娶(かじゆ)せんと定(さだ)むる家(やから)を
此沙汰(さた)聞(きく)ときハそれに我(わい)もとおもひて胸(むね)
をあかし常に入魂(じゆえん)なる医者にたのミひそかに其の
しのてなり何しぞ業様屋の婚礼(えんれい)を婆羅(ばら)を
なす方便(てだて)あらバ随分やとひ相談しけれバ医者共がら
くさしうらむきさ何でもしやうん工夫してやらし
とおもうしてのくん金子二拾両おせよとりへいひや
さしく金子を渡しけれバ医者彼業様屋の店(たな)
に行くは左うだらうを賞(か)めんとて業様屋の

手代共ひそくおしけれバひくきの御孫から也
て見居たりけれバ手代どもいひあへるを此家に
そうでさうしや物いふなり病を治する業者くひ
我等近年是非共に婚礼済て此主人親方(おやかた)共褒(ほめ)置(おき)
諂(へつら)ひも功能(こうのう)とうけたまはり侍へども一医者の
いふくお様さあるべし此業様当て珍物(ちんぶつ)なりけり
此物なく治する病(やまひ)も千人万人の中にあるや也
とて手代共いよく誹(そしり)しく抑ひそくさゆうに
大切(たいせつ)なる病(やまひ)は何しも病にいやしいへど学及ぶ

こしはあるべけれども久しく見およびしなされてはいかゞ
ゆへ轆轤首とて病なり手代など太さに抜けださ
咽ふとくは異國に飛ろくび獠といふもあり多
かゝりしへども日本にはなきものゝやうに存じ
ところに然れば現在當地にも今あるや何れ
の方にあるかやしらんで、あまり走りしかど本丁
筋の裏店に浪人の娘なるが、こさつやうはよそ
どもいやかなる病ありて、やがて月に縁組もあるに
付て何とぞ此病を治する医者やあらじと療

なる所に拙者一家一流にて此病を治することを教
代相傳せしを覚おりて、頃日まさりにたのむ由へ
に此くすりをもとも然れども此薬に真偽あり
或は舟に流されしは皆偽物なり真の物は慶長年中
よりかく流されしなれども今は人知らず、残念なりは
彼病人治するにかぎりて今見ても偽物か
されば不用になして既にいなしとしたれば尊顔
このわざにしくはなくこそと病人の
親の名は存知あるべけれども何やらまし

くるしからずハちかしくハ志らせぐさまりしと
いまだ医者ん中にはまだくきまらしおもひあり
ぞ他言(たごん)へ無用何の何がし(奔帰)とかひあらく去ぬ是に
よろしく業体の婚礼(えんれい)だまして嫁(よめ)の者をよびよ
やまと女揚子(やうじ)ありて変改(へんがい)してとりかひせられしが
件(くだん)の浪人(らうにん)大きにかぎりてんしいかなる揚子ふく
が往来拾り結納(ゆいのう)まで相済変改ハなく離別(りべつ)に
ならぬ不肖(ふせう)にハさむらひ士(さふらひ)の身ぶんハ娘(むすめ)を貞節(ていせつ)を
まもり両夫(りやうふ)に仕へざる所存なるものにハ揚子の

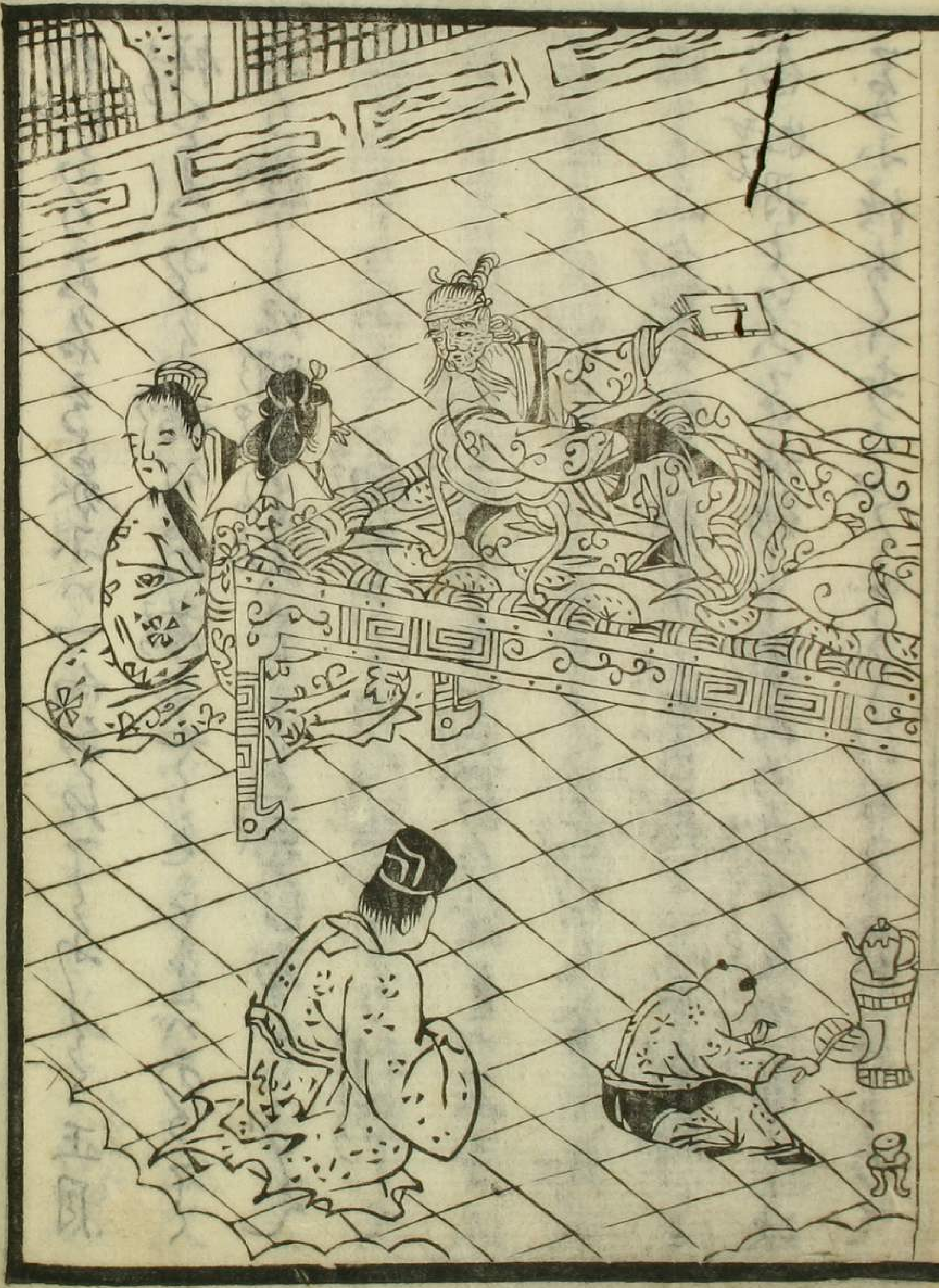
子細(しさい)とうちなりか取(とりけ)く文子(ふし)にも不存よりひと
てしむ流れしく男なきハ嫁(よめ)当惑(とうわく)してく業体やの
手代なまぬがれなく問ひ男なきが病(やむ)なを済ぎ
しく志かくのるみありしと這ひまうだそうろ
まとくなしくかさりなきハ御嫁(ごよめ)彼(か)の浪人(らうにん)ま流がさに
談しなかな浪人(らう)のいひて医者の名を出しとげ
なりやと又嫁ぞ我ハうちなりとどもいつまで付
浪人あやしくおもひてノ手代共ぞさく出す(とう)
なるべし委細(いさい)ハしらに出す事を見えし人ハ嫁是ハ行

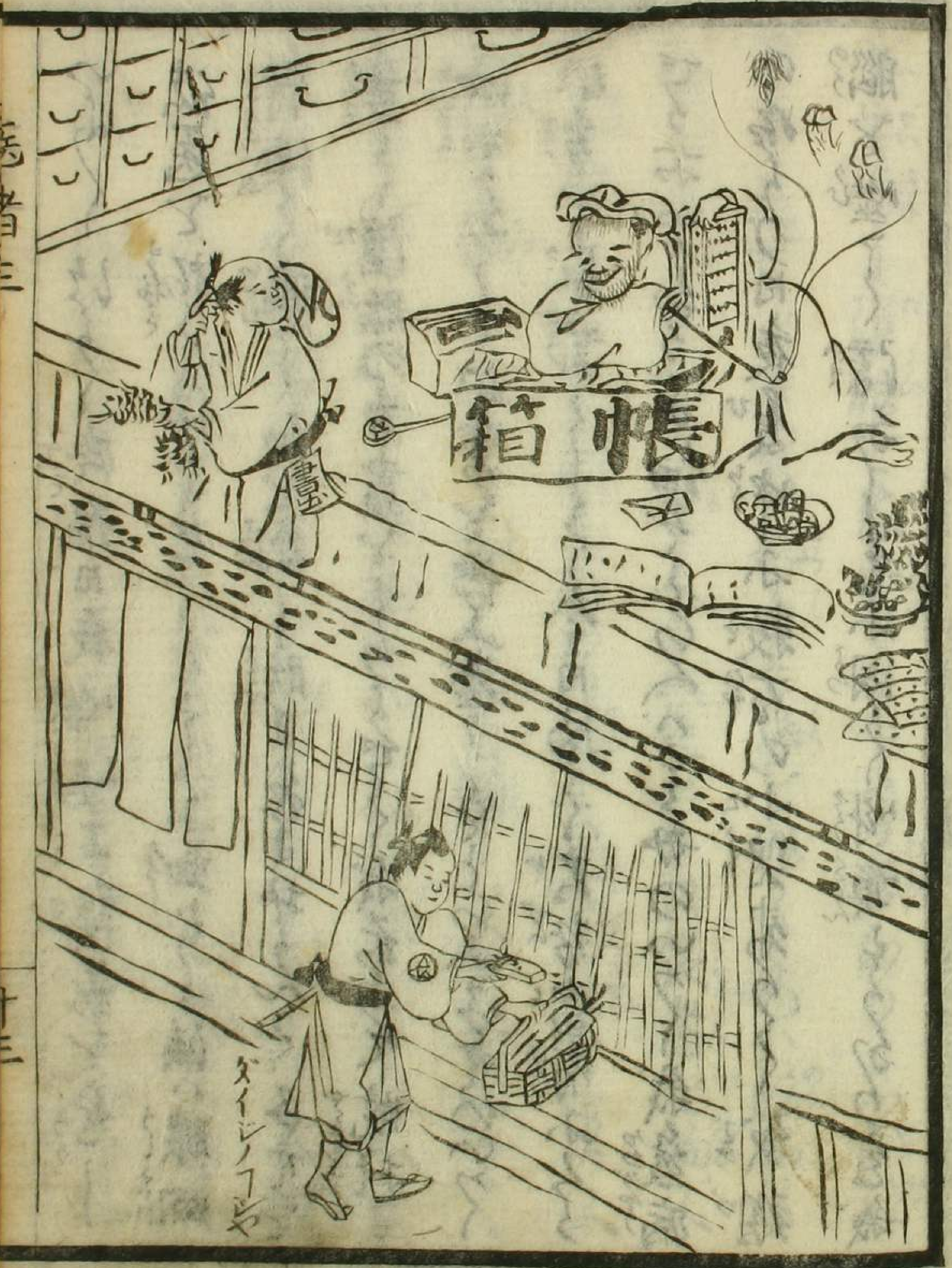
去くまく業種や、是つ事行く易ゟ事べく代せ
まばれぬ者とも氣が付ざして医者
の名を易ぶりしくさう〻むけりしくおゐて
業種屋変改をくさいひ先の絶べるゆうにおゐ
て業種や甚迷惑しく毎日く代せくとおもして彼
医者を易し不果しく其丁筋の裏店を借宅し
く居る所を易付て何でも致さていふく先ん日、
ハ始くの事を済ければ宿ハ是ふくはらく名札を
かし見たく歸りて家人方へ委細を承る

宿をといひけりし事べ家人けぞん志ふくそれ
屋ねく昼夜お入医者あり〻おゐて拵んとせとひ
ござつと思案きく定て不成子細であるべしと
見を詮く拵子を明けくら〻るさる不屋日の所なる
所ゆるを知りく不承て事を申しむずくしとぞ沙汰
訴へ訟る事べてぞくるは味あらし不屋ても通おつ
医者との所は名を白状しる事べ屋日へ通
やくは江戸近ひちふ事家財を家人不下され
医者へ賄賂を私く前代未聞の悪る事と坊し

とらく町中にもてなさし油法なる様なるなりしとなり
まよひは漸なさ無てなり又あるべしれてなれど是而已
なれどやうをきけば医業に従て悪ぜるに荷擔す
なくしある彼のあくらみなるに堕胎のくすりをこしらへとか
す医者あり不仁至極第一の悪なるなり小の虫を
殺して大の虫を助くるとの利口をいへども
子をおろすをハ多くハ密通の不義の中にある是不義
に荷擔するなり或ハ夫婦の中にも子多き大勢にて
なんぎなるとて堕胎するもあり是まて父子人倫の

不仁なり大名高家にハ一向なれてなしらく正月
婦をとるなどに携れるの者まてやくをきけばおろして
あり親しき朋友まで人のこころを悪むべきなるに
又くすりなくハ効なきもの陰戸より刺針して
おろすをハ母を殺すなり然れば不義に
荷擔し不仁に処し天よりの人命を断ハ
彼らに龕の巨賊なり名医録に京師に
牟牡丹といふ者出家し婆あり或日忽頭痛し次
第に法らくおもくなりて日数法あって




帳箱
ダイジンノコシヤ

いよいよ酷く疼痛日夜啼喚声隣家を驚し
彼医を招きて治せどもさらに効なし後ハ膿爛
腐潰して痛ミたえがたし既に死するにのぞんで子共を
集めて堕胎の方書をとり出させて我前にて焼捨よ
汝らなんぢら此業を伝ふる事なかれとて子共の内にて
此方を家業として今日渡世す大勢富有になり
ける所に何なる子細ぞや此人ハ其母のいまだ我発病
の始より日夜夢中に数百の小児来りて我頭
脳を嚙て隙なし是に困じて悩喚するなり是我

平生常に堕胎を家業としける報なりといひ終
りて死せしとなり孔子も俑を作るものハ後なかる
べしとのたまへり古しへハ人死ときハ従者を殉じて
生ながら人をうづみしが後にハ藁人形を作りて人
に代て埋しとなり此藁人形を俑といふ是を作りて
葬るものあり此者ハ後絶なんと孔子歎じたまへり是
偽にてや陰陽和合して命を天に受て人體
となるものを堕殺するハむごくつれなき事なり此業
を施し行ふ医者ハそのむくひ現にみへずといへども

自然に貪欲あつてしきぬりものなくして又その親を
ものゝ為に胎をおろさんために子を殺の不仁いふべからず医
あるぞかし見れバ婦女の陰悪男子に倍されり
されバ不義にして殺して又子を殺すを無慚
無愧なるとしかるべしふくむべし或ハ多産を
いとふて夫とともにふとも女ハ物そまるか
あむづさふ多くハ女よりすゝんで子を堕すを見
るべきを残忍なりといふべし医ハ仁術を表とし
而に裏に残害の事あるハ医者の冥理に背きし

医家十禁の第一に女室に入て他意となすべからず
されバ假にも病婦病女に対して妄に戯ごと
いふべからず傍人なくてハ診脈をなすべからずと禁めて
有唐の法にハ大夫以上の婦女の脈を診するに
幔幕を隔てゝ伺ふとなく婦女の手に羅を覆ひ
て脈を診するなり此故に中華にハ腹診の法なし
和邦ハ腹を診ざれバ医の粗末なるやうにいへる
あらざる故に男女ともなくて腹診をなすといへど
も相なくて臍下丹田より下の診脈ハ無用なり

一医者談義巻三終

但州 湯嶋

但州 湯嶋

養生
教訓

醫者談義

四

但州湯嶋

醫者談義巻四

病家需医之談義

類(その)く御せハヲつどもうらじや偏(へら)ありや浅みなから
でハぶらりまゝと糞滑無招ゟ御在宿(ざいしく)とを祈り侍
とあらバ只今のうちちよつとしらおくござりませ急(きう)
病人ゟ承り侍とて妻羽織(つまえおり)おしや羽織(えおり)ハ一吹(ひとふい)き
僧(しう)よ中门くさの人ゟ脇(わき)よ着せ侍した南無三(なむさん)
寸善尺魔(すんぜんしやくま)の貧乏(びんぼう)神女しをよめハ見せね福来
屋の是(つい)始く御有おつさまよりまさまをどを叱(さのへ)る

但州湯嶋

なふかぬ目まいが起(おこ)つて又此度の気分にハたて
きぬかさ様わたくしハ何じやらふくをたのみ入しますが
ふじや御加(か)減(げん)を持(もつ)せて来りましたぞ医者(きやく)の
うちにはこのまゝ上方をサアまだ御加(か)減(げん)でとらかぬ
目まいしてうまい事のないゆきぬとりくくてくるハ
釈迦(しやか)がよびよせてくるとゆうぬへさいくし腹ぐくし
がふいです丈ハちうさんくも是非(ぜひ)がなりぬし足(そく)へ
きく義わ三代の命(いのち)があつまいのさらくに細(たき)夜の内
うらむ数(やぶ)手(てくび)がさくく五十久(く)わかりの医者方皆(がく)同(ま)

ちがふくし流れやれへつまらぬ後(あと)へ例(れい)の諸生(しよせい)六
七人だらぐくし来りて並居(なみい)るまへ糞得秋いわくぞ如(ごとく)
ハよい夏(げゆ)の見ごとなる腹来やの持丸(からまる)りうびよ来
まじくと指合(さしあい)てしがみつくゆうなんぐしあまへ諸
生何まとりとそろへつく御越なされつぐ御仕合
まる病人ハ只そ埒(らち)があきて内したとりますとまる上
あのふくやハかくまとなき死(しに)もせ上の古い者(もの)ま
ハ昔(むかし)の業様安うりし格(かく)を却へくやをるまべ
一服三分充(あて)の薬礼あの腹来やハ弐分充それ

此人一度なりし医者ハ懲(こり)/\てふたゝびゆかずと去年九
當家亭(てい)主の弟左清門が大病を煩(わづら)ひて小山(こやま)寛(くわん)雪
がもとへの療治(れうぢ)去暮年際(きは)まで寛雪方へくすりの服
数(かず)を見るにたまりしハ二百十六服としハ弟分の為
て件(くだん)の武分ぐすりに志らく見しハ銀子を抜餘に上
ゑ見れハ志らく分の薬礼加賀(が)絹(きぬ)壱疋(ゑ)二拾目づゝ
ちからとやらしく見えしかれバ寛雪方に胸(むね)わるく
遠(ちが)ひ弟左清門殿ハ病氣の大僕(ぶく)の如く従座(しうざ)して
此念(ねん)入ましく時(じ)服(ぞく)ようてせてやずらぬよしく加賀

絹(きぬ)ばかりくだされまするを承知存ませぬとござりまする弟
左清門殿の病氣ハ大病にて中々難病(なんびやう)にてござりますを
高(かう)貴(き)の薬味(やくみ)を以て療(れう)治いたせ候して全
分様ハ薬店(やくてん)のやうにくすりが増(ます)あれまいらせぬれく
に薬種代(やくしゆだい)を銀子にて払(はらひ)くださりませ先(まづ)は絹ハ
久しく病(やみ)も快(こゝろよ)く致しぬ折節(おりふし)薬種屋共の名れバ大の
仕形(しかた)をいたしましたそれハ三百の二十匁大ちがひの事ひ
なされしくされへ何かとりかゝり　帰脾(きひ)湯(とう)二百十六服
それハ寒気に相場(さうば)の薬味人参へども何ぞござりまする

たゞちうち廣東をへて通ふあるひとや通の如く
ちうつし一荚腰より寸珍の算盤かしこくちうくと
たゞいつく見て尓が一服のくすり壱分弐分屋いつ
二百十六服代メて見てきば丁度弐百七拾目ぞへ
さよくしが白ひ性せよといつて尓が大晦日七つとんゑ
にかうつしくれかし揚まきば湯水がなうてんし
兎角さ多いもの是来正月廿日拂ふいてさべし
春ないてつく埓明ぎと大さわきなりかへしなり京中廿
沙法かくをなく医者のたぐひは猫ものや家は四羅

生門よりいづる晝でも往来いくらと今日秘蔵の
孫夜半より痛が此より洛中を医者さがしいてし
倒したが何者れども一人も息ぬ合せぬして汝
汝ぐれざり倒もし治りなきば糞浮所ぞへきて
至扁鵲が以て家財をかたんじて死をまぬがるへ六
不治の一なりしは是を類なり世俗多くはその数
あり器物衣類遊楽のことには費をいとはねど命を
よせあぐるしくを救ふ医薬のことにはぜにを惜しむ
費をいとふ病命ぞ医をいやしんずる輩のごとく死

福寿屋

京都 三角先生

生したるにてもさつそくハ医の劬労せしことを忘れて物まへ大晦日迄にいたりてわつかに菓子としてはしてふかかへ置くそこらにありて難渋せられ医の風俗をく急時に及んで合がたくハ内々謝礼の為とさがりてハ不なり出にて浄退の医にハ時物の音信老医にハ遠暑の吊ひも絶えて物しく病用あるときハひたすらに信仰しそこし絵がハ早く謝礼を厚くさるときハ此の流行る風俗なれ医者をかるくなりたり風俗なれハ二種あり一ッにハ病家当るに随ひとまてハ不

とゆうの医者ハとかく呼に来りて只一處ぞろりに衣服を着て僕の縄なひをやめさせたとめんどうなまへ多くハ又とりにいてるに尻ふとけれでなをのなり四十に餘る医者ハ終に寒夜の寝あてまへし小夜中に叩起されて台あて二三百して家内の者ととも起しせを起して遅けに湯をさらしかくし不時の失用費あれども病家さらに氣の付ねこなりあれども謝礼の厚き病家ハ皆とれまでて其の外ハ皆頃に物かりぐる病の医者

の方にあきなひなり医院前乃某法印ハ病家より
来る幣銀を封じたるを倶に嚢にをさめて紙で
まとく後一度にあけてかぞへてみるハ病家より礼
さまざま謝礼の多少を知らしむる人情常に
まさく厚き人に向ふてハ笑ひがほに疎き人ハいむ
かゝくハ拍子木なく鼻あしらひハ賢愚をわかずかれ
不止意をとひてかくハせきもしらず志りし
君子のうへより見れハおかしむべきハおもてを好ず
為さハ好ぞ巧言令色ハ鮮矣仁し孔子ものたまふ

つね厚きも不足とうらみもせず疎きも厚きも
いはずよきあしきハ謝礼を厚うするハ志の
疎きなりしハ心よりハ疎意のあるなしハ然れバ厚
きハ厚きに薄きハ薄きにするハ君子の恥なる所なり
然れどもよりみれバ某の法印の仕形偏なりといへん然
れども宋の張彦明ハ常に術といへど医中第一
等の人なりし術紀にのせてあれバ彼の法印の意味
をまたく萬一等の人なり今の世利名に貪医者も
一日に数ぐるしくなり当世ハ謝礼の薄きをなげくハ

扨なく病人なくても外聞なく炎暑の見まひ
朔望の請しも山よりもとらへし薯蕷里よりもとらい
しさく芋周などいふよりもむらいし籠着寺よりさ
くへの付届謝礼とは何のことやら薬飲でも大ぬさ
ふかなくもなくの医者に四手おりあて終に薬
礼せぬものみを病底にはなくしゝ扨とへし扨巧言
令色と字くとる医者は医の本意なる医は見ゆる
同くりしく口抑しかるべし丹おひ子が終後熱せしと
加茂斎は哀ひしとなり斎は隠居の医師に

しらく城下をはなれて所山里に自ら耕作して世上の
名利をもとめざる医者と白眼としく睨しとなり
或ひとれに鶏卵も蕎麦切と大食なされ上に飲酒
なされしかば蕎麦切胸に彭満し頓にせまり
呼吸短息し腹痛も服まで絶えざて既に危く見え
させるまでに扨て扶持医は病論城下府内の医者大勢
あつまりしやうにいへどもそのさまりの大食頑然
なるに独参湯の場もとあらずそのさまりと急り
消もなくなりやありし各顔とあいに見てあんじ

ほうびなりけるに加藤茂斎とて儒医の功者なり
しかるにそのおもてばやまひをわしきにてまへちかくへ呼び
むかへし所に茂斎診脈のうへまづ申上げけるは蕎麦
切と一膳たべられしなれば茂斎そこで切を試みやう
やありし皆附に八ツすぎのこのへおもしなれば其ものの
御膳もしくへばいやそろひての膳をうしてはなし前へそ
でさりしくへばに二度の御膳に仕そこく急ぎざいら
来きしとゝへば何事も申しかるゝさ始乱く歩づく早速
仕立てくけるにはおなじきば度に向ひて此をござり今一

膳喰ひ申されし上は一度数をうちわすれて仲人へ
申上げるべきにてはなく候茂斎薬をもちひ申さず候
此蕎麦切申上げ候はゞ療治の法なし是非なく今一口
と申しければ忽ち起きなほりければ茂斎一口くらはせ
みせければしばらく有て嘔とて吐出されしには上より
一口の蕎麦切のこらずめつさり吐出されければ
ひやかしやく胸痛腹痛一時に止んで上下薬を与へ
て悦びければ茂斎御礼をよろしく後に平胃散一二
服上げせしに申しければ退散いたし翌日白銀一百枚綿

百把為指ろの御使者と呼つきば何ぐくのんぞ家
名は何と申して向かうたりしば徒歩組何某と答へ義無
お合をしらく勝手よ案内をらおれこさの土塀
仕女しの御用よちてまじきを御くきりへ上げときやう
あり弊物受てさう子細なし早く持てくてまじと又
へ使者当惑しく弊物うゝきぬへきものくも敵
よりの御懇のあさでのあり一従使者よ対面なしてくは
使者の一分立ぬとつりり参しくひしめさけ
ましは義秋決するを明くる自分とあふどりく以ふ

ホハあらぬ今義無う不浮ずさ不違なくりよう
まよ戦場よおるくハ敵の御扶持と兼るの一人を
のうてぞ敵の手さきよ御合よろうんとせん忠
然るさをの一人となしこそのみのごとく病ふさせさ
まうふとれたまの一人助るく倫つる者ありしや不
小指者のる名をまもれ扶そたまば指えんとろくも用
ほくぞ御運命浮くささせさるぬ不へ疵むうく
門物を納るく向へく奪しつへ浮とれく御命助る
さくほつりしハ扶そろくハ起信が功あつとと徳ん

今日ハ元日なれバ幣物から此しまゐらせんと参らづきあん
足下に對しきバ我等ハ民家に住む野巫医者なれど
民間なるものゝかきどもゆても敬ひまつる古人宗
の世宗ハ衆を罩ぶ日用なる大醫院の官をさづ
け徐華亭とて長者ハ子息を以て卑賤の奴僕
と称させしとて例ありし山ざとむきさ清ぶるに上
らきらしひろきバ使者時に伏し立帰りて委
細申上なきバ諸侯何まどあるまじ以前いかにし將
じかるに家老の一人をてみあらく敬へ申上なるハ

我等がやうなるあり高きものニ代家中の諸侯何
ましも必ず堵仕にいて汗水がらも何まもいかゞしとし
とるべからずしにいかにも無き身を存ぜざる亦まこ我等が
陰様夜変のためにかられ按察の手りし諸家中の役
び我等一人まで飯しもにて諸侯の惣名代に指立
越てきなし申上なきバ左志かるべしとして家老乃
一人訓らく案内せしとあり寿たる我等が向へて
奪への法庸医の申すぶつき亦あらきぞ演しき手にそ棧
量丹かまちが大りに用きり蓋南蘋子に海常を煮てる

餡なく蕎麥切のなかりしとみへたく扨ハある人絶へハそ
ばと消さらるものとやり然れども今まで試ざれバ決し
がたし但海草をこのまく蕎麥と大食し飲酒せん
より小食なりくそバ後酒を飲ざるにハ志がし余が知る
或人旅宿にありくふ御内ぐの蕎麥切と大食し其
上に酒をもざりしてそれより胸腹に停滞して吐せ
どくだらず七日ましらく死せり又一人而も是ハ医
者なりしがそば切の答意に二日渡ざるく大食し
飲酒しく二日めに即ち席にあく卒死せしなり

兎角そバを嫌ふといへども酒ハ嫌ふにいたらず色ハ
心腐なし世に俗語あり蕎麥切ハ珠數為まて売
せバなるまど嫌酒ハ胸にとゞまらバなるまど気を呑
がなり色ハ心腐なりしハ腎を腎ふしてなすに之人
よく腎より色の欲がうれてし知るべし腎はよく人
よしなれバ腎の堪忍となるべし固より腎なれバ
色に溺れてしるにつまらども不腎なるもの仲人に苦
かなり故に腎を賢としてとあり志かし心腐な
しとハいへども酒を飲てよし多く斗ろく人にハ生制

ぞ待しと自然して脈ハ名ありて其色を油断がなら
ぞむかし幽に六十七の婆と十六の蒼奴と間夫狂ひ
の総角陽ぞの色事とろしきしなりし七十一の耄
と十四の小女郎か心中せし弄曲三味線にあれてこれ皆
偽り虚でもなかりけれ

至賤中有殊常功説義

韓退之が云へる牛溲馬勃敗鼓の皮まですも収貯
つかひ用を待て棄ざるハ一医の良なりと牛の溲
馬の勃敗鼓の皮を兼てなりがたくて何の用にかす川

さのぞし記臆すべし一医者と女房ハ姪なりして
玉座金褥に上るからの女ハ貞烈に名を美を
なすを要し次医ハ清潔の術に精しきを要し次術
に精しかりんとなるハ霍乱病人の小便通ぜずと秘法
娘のころちかを愈すとまハ牛の屎を用ゐさると知
るべし昔元和年中　雲上の御歴々御産の御難
産にて混滞せさせ給ふなひ名あふ曲直瀬のがし伏竜
肝を進じらく玄所に御産平産なりかし其日賞に
よりて曲直瀬を改て別に家名を与へられし

雲上の御歴々みな停止ませば関東よりハ道三
家玄朔玄鑑父子半井家久志本家それ〴〵ある
御医者数を停くして前月より上京さして相詰め
京都ハ勿論御産医師松浦家それ〴〵典薬亮錦などを
会合の中に曲直瀬衆医を抽きて又玄朔など陪す
伏竜肝しかし上たるハ停して小独歩の才医中の龍とも
云ふべし一医ハ汝を抑ふべしかゝる才を表す軍
場に向ふて一しあり又雛頭なりしあり宋の徽宗の
羅妃痩嗽とらえひて終夜寝ざりし数日ありして

面浮腫く盤のごとし入内の医官李防御とし云く
治療せしむ遷延して日を経り帝怒て云く
今三日のうちに治せざれバ汝を誅すべしと論言
おく防禦一所に汗をながしてものぶして家に又
其妻に別を告かる勅令なきバ我所作なし
あらて誅せらるに極まらね妻もと嘆き泣ける
しうだらし拙き門前を嗽のくすり咳気の業て
売るあるくものあり妻のいふて至聖の中に殊勝の
功あるといふてあり今売あるく嗽のくすりハ甚

志ありし病人をとりむ君術はさなば此
くすりとゝのへて上るまへにも炙をたれば防禦孩児
の指帰に渕をのがるゝのみにして有がたき事也妻乃
いふに志たがつて此賣藥をさけずしむべし忽疾嗽出て
浮腫をうけ飲食常に復して急効をあらはしし
ありけるべし唐の一医者は婦女の指南によりて貝殻
の粉をくすりにして后妃の病を治し日本の
玄鑑は弟子の慈が宿を越えて竈の土にて安く
と誕生ありしもあるに和漢ともにそのためしすくなからず

同じく我朝の医をも中華の一医に劣ざるものあり
花山院の御とき高麗国王の后妃大病なりければ名だ
日本に来り和気丹波の両家在る丹波の雅忠が医
名中華に聞えしかば高麗王雅忠をまねき
むかへの使者ありける時に朝廷衆議判じ給ひて雅忠をも
てやり給はん事いかゞと申さるゝ是非一決せざる所に
民部卿経信放言していふ高麗王の内證が死なば
それこそ生まれても見えず日本の熱気にてたとへば
さるゆゑ雅忠をもつかはしなば後に日本の名を

あらんこれハつゞせん無用くしいつまく一言をと
破る衆声山をくちの医房庖ちの諸よ雙魚雜佐
風池とく浪扁鵲豈へ鶏林とく雲平し秀逸の句とあ
りし我世の名をとりざらせしなり經信の叠にハ才のでら
さなり医房の秀るハ学の博がりてを正玄鑑の伏竜
肝とおもひ付ものハ常に医学の当然なるがへなり
防禦が妻のてがらと入まかるハ胸臆のひろさなく
偏僻頑固にしく賣業なるの治をつくさにあらず婦
女の知るべきにてもなしかゞなし充く男ひとんべあへなく

前とうしなん此を以て知るべし獨参湯と六参湯
とのひ紫蘇とちそうとをふやうなる俗医を付まね
て仕あくるてしあり野人の草鞋くひま藁のをびを焼
く付るが妙なりとふハ同氣相求むる同声相應ずる
なる理なり惣じて医ハ鄙事に多能なるべくして廣くして
と知るべし本艸の醫とさるハ磨の理なり蟬脱の夜
啼と止るハ蟬ハ夜なのあそびなり又物類相感じて理
かのことありたをふるく泥鰌の踊をあぶだす究澤
丸とかざりく鼻血を止るハ狂いんとてこれまん

ごとし只一医の疾ハくせうと用るにも僻の偏なるに
ありき医旧病にかゝひ旧薬新方を乱ることなく
昔年行ハしを治せしハ其くすりなり今世上に流布
するハ其方なりし執して方薬を偏に處するとし良
医といへども末ぬかまほかし一薬万病を治するが薬
ハあまどもも一薬万人を愈すくすりハなし東家の
病人と西家の病人と病同じといへども人同じから
ねバ同薬を以て治しがたし独りに在るへバ熊膽を
以て諸病を治し或ハ甕撒を以てし或ハ偏に附子

を用ひ或ハ悩熱あれバ冬天といへども石膏を要とし
或ハ発狂をとゞろして百壮千壮と強壮するハ
藤瘤を用ひて諸病を治せしさぐひなり尤
病を為すこと多くなるを得るハ信のみなと云
なり世上の風俗とれとして一興一棄古来相同じ余
見る七十年以前耆婆三孔等とて物天下挙用ひ
又汲み補仏英を汲み恐るを汲みて積雪草その
とれく不流布となる京田舎一変にこぞり用ゐと
いへども久しからずして癈棄となるハ物の興廢皆

衣中先生
佐々六工

伊羅コアナ

独り扁鵲がごとし人の病む所ハ病の多きを病ひ医の
病む所ハ道の少なきを病む凡治法の道ハ汗吐下温解
の五法の外なし然るに今ハ汗吐下の三法ハ置て用
ひず只温補を要として和解を用ゆ医ハ偏きなり
凡人の病む所ハ千差万別人の顔の如く同じから
ざるがごとし気血寒熱の四証ハ皆一なりとて其病状
の表なるも検ず決しがたし唯医の良能なるハ
経を内より出ると見て出ざる所なく治不治を分
別することに功を主とす蓋當世富有家に大病あれバ医

者を多くあつめて病論にたかぶるもあり是巨なる
不益のことなり病家ハ常に医の意ハ皆一同なるを
のぞむといへども然らく一同ならず職ごとに互に
心底に秘しそ秘とゝく各我慢ふかくして己が意のまゝに
ごうせんとおもふにあり故に凡医会合の席なくれ
威あるハ辨舌利口に任せて他医といひふせるあり
或ハ学文ありといへども弁ざるあり此医ハ人前にそハ
阿黙して批判せざれど陰に便りていひさまたげ反て
邪魔するあり市井の医ハさもなり扶持医仕官の醫

みだりに放乱ある所の士は身を縦じ名をけがすんどろが
故に戦場に臨むは親を忘れ主君の矢さきに
たんぼうをかまへて仕官の医も常に恩禄をかうむる
ことは同じ私意を忘れて専ら主君の御為
上を昼夜に衛護て夜も安くは寝ず昼も宅へは
遊びにも出せず喧嘩口論せず同侶の医者仲間と
よく和し別れ合て常に医談講釈して主君の御病
気とあらば何れも意を一つにして看病しつくすべ
きなり難哉衆医意を一にするの蔵を欲しく

衆医の医案をきくんとするが人別に独案を札合に
まかす衆評多分に委ぬへし然れ共衆評医あつて
依怙贔負ありて非を山と一訣されることあれば
とれ常に得意なるものに学力ありて正直に長じ
たる人に閑づきなりといへ世俗の諺に医者智者福者三
益の得意とはいへなり故に常に出入する医者に心得あ
るべし医は国家に至つて付るものなれば平生の出入をと
ろけもちぐわるときもされば内乱を生じ不和
なれば却て病因のこれ厳なるを得し

但州 湯嶋 中屋甚左衛門
但州 湯嶋 中屋甚左衛門

あぶなく治療とあやまりしあり履ねざなり
横になり寝ねく入夜になりてもまだなし祝儀婚
礼などへバ一番にもち出し膳を取持が婚礼の座
席に十徳を着し小謡などふり酒宴の興を添へ
まくハ謡ともに寿浄るり見ざるし礼儀ある医者の
癖として病用あるといへバあのくもいとひなし
て医はあやざるものなり兵と医とハ凶器なりと
あきバ祝儀婚礼なりとても少しも致てちろ
ぞんれ喜物贈答衛追従をする医者ハ疫病

秋の末なるべし

医者談義巻四 終

但州 湯嶋 中屋甚左衛門

養生教訓
醫者談義

五

但州湯嶋 中屋甚兵衛

醫者談義巻五

疱瘡神の談義

濃州時の郷より来りし徒然に時節安からぬ奥底なき短気なる者問ていはく或人のもとに不惑なる一人の男子十三才になりてつかへて寵愛なすがし疱瘡にかゝりし物熱より父是非て深く憂へて神祇をいのり疱瘡の神をまつりて恭敬をなすがしく此子の瘡無難なれしとねんごろにしく昼夜祈誓せし下にてつらく悪瘡なく

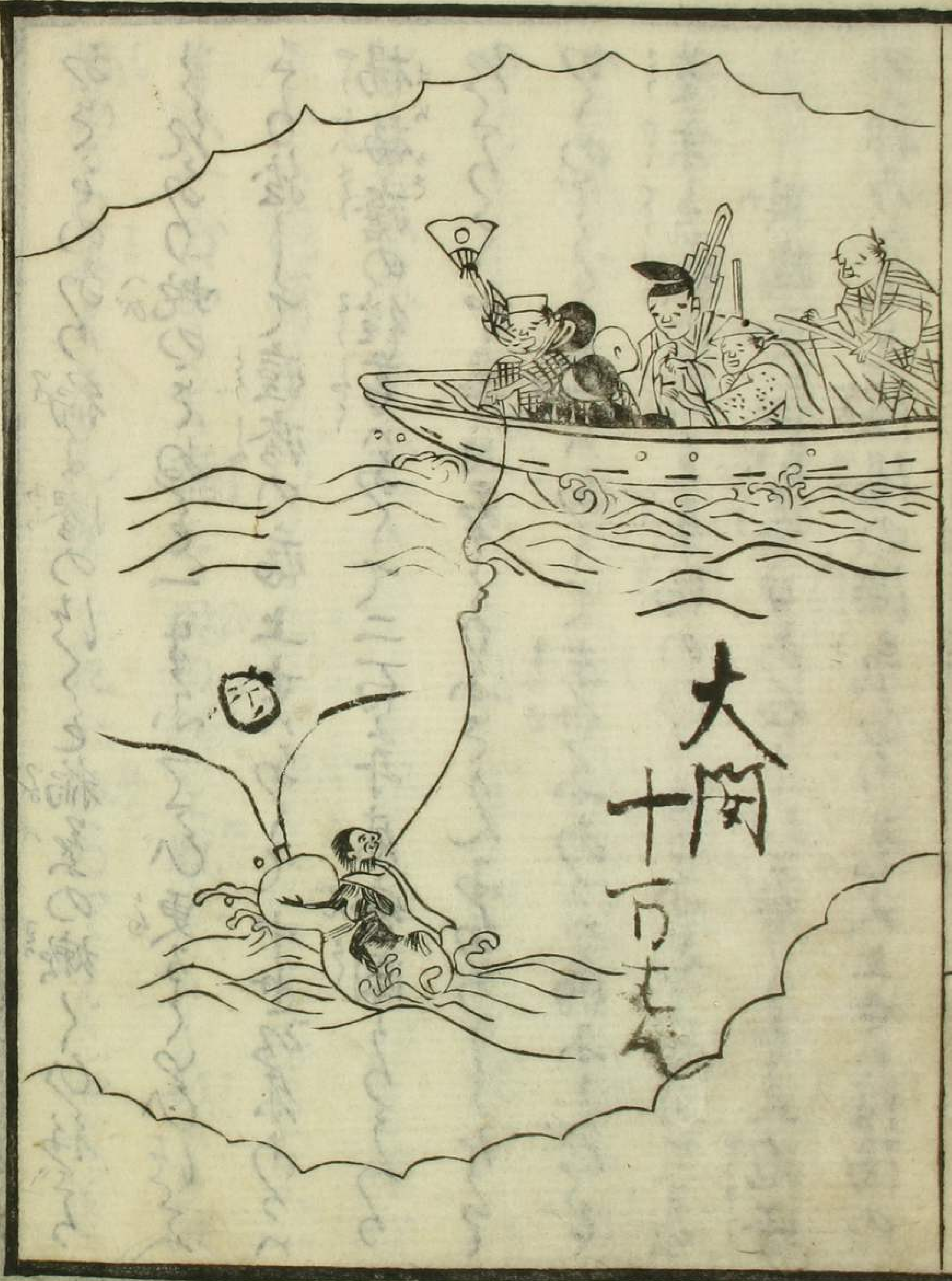
但州湯嶋 中屋甚兵衛

収壓の比終に落命なりし父ちかれは愁をしん
く忽怠氣おこりて神術を散じふちち出ずり
疱瘡の神を悪口し奴をいくしあしく疎なくさら
彼の泣こゑさゝりしまゝ彼の旦朝しくむかひなる家
の男戸とあるく神を見んとするに彼疱瘡病の家
より老女のさとかへりてろくしれが血皮をまとひにかくを
家より出て四五歩ありびの家に走入りしその人
よう家の子を日より疱瘡にかゝりしなりと語れば
疱瘡の神といふものありやありしてその家内の者

の内にかくそれしてる向ひの家の者の内に見んとする
あやしくさもとく向くまい嚢簿をさゝへていふく
公往疱瘡の神ありせよ疫病の神とゆふものし一
類門物なり疱瘡の論唐の医書に皆胎毒と論せ
つま小児生まれくより胎にしく此病あるといふ胎
毒と論ぜり抑疱瘡は上世にはなき病にして中華
にもむかしは唐のせうに始まり日本にはなく天智天武
帝の比より異国より渡り来まり異国にてを
達靼にはなくて中華の人いまでく疱瘡せざるものの

達る人をバ一生のがるゝでども達の人中華に入バ
かならず疱瘡をうくる事なしかんがふるに
胎毒といふハ上世生れし者ハ皆胎毒なかりしや
小児にかならず此病あるハ蟹に沈風のごとき苗に膠
のごとくかゝる幼かりし精気さんなるゝ事にこれ
とうまる人一生に一たびうまれかはりたるなり
さるハ疱瘡よりひろく痢病傷寒のごとくひとゝ人一
生に一度なくてハ病ぞ蛇の鱗を脱がごとし蟹に沈
風あるハ外くさんなるゝ上熱のいでさる事なく

なきものなり稲に膠のごとく稲葉の嫩くむすぶる
ことなり蛇のきぬを一生にたび更るとひとし又
それ於して痘疹の病上世にはなくて中世以来あるハ
楊梅瘡の往昔はなくて二百年来蠻国よりわたり
たるごとく中華日本ともにさかんになりしなるを
かくのごとく上世にはなくて末世にあるハ病にかぎらず
草木鳥獣の類も文物のひらくるにしたがふてさかん
じ異病異物おほくあやしむべきもあり又疱瘡
の作乃ことは陰陽の濁気なりと又上世ハ陰陽の


大関
十万もん

アヽノタノモニアラ子トモ
人ノタチイニシホドコソナレ
ケフリソサ

清気而已なりしが雑にやぶれて陰陽の気濁て
て凝て邪鬼となり疫神となり疱瘡の神となり
なる故に上世内経に論ずる所の癘論ハ皆是熱温
涼の正気の鼓作する所なれバ人に治法鍼灸湯薬
をもつてしけるが今時の癘ハ皆不正の濁気に時気
の悪癘の気を加ゆるゆへに治法も皆あやしき術に
て治するなり且又是なるゆへに其家内の人の目に
見へずして他家の人の目に見へしも又不審一理
あり彼疫神天狗魍魎魑魅のるい皆幻化の神にし

て実体にあらず蛟の蜃楼とあらはし鼠のわくさ
家猿の城郭魚鼈の龍宮城皆実体なれど幻術
者のなす所に生じ火なきところに火を
生ずるなどし一とせ大和の笠置の辺に猿ひき
の渡しに猿引の乗りて舟を出さしてくだりしが
舟賃をださせざりし舟渡しもの人々さまざまといふ
て舟をいださしまへバ猿引是非なくかはりてわたり
しもて渡るゝとものにへだてられ渡りせしかり船
中の乗合何れもおやうしと見しに離なく渡り

浮かり笠置の山に人ありて是を見しに猿引
猿に瓢とてぞせく川に流し瀾と引く己れハ船中の
傍に屈居たり物の人をたぶらかすも皆此類なりけれ
狂の子なり塩釜の夕煙いと淋しく見れ日に女の
子といへどもれ来くはると火にあてさせくまとひ塩
焼ゆりしてあてさせたり釜上より見れバ女の子といへ
ささるさとなり釜下より見れバ狐の雉と毛やさ
とるなり共あはれおしくて雉と浮たり此あしく
見るべし幻術者も妖魅のさぐひも人をまどはすと

に厥界ありて厥界の邪気の物にあらざる所にありて
てハ妖孽の本性あらハれてなり猿なかにて猿引が笠置
の山上より見たると知れど狐の釜下よりのぞくと知
ざるかハ皆妖気のいたすなり雷に異形の者のさぞ
ハまさく霹靂とともに雲気の縫間より落ちお
ちるがごとし狐狸の人を狂惑させるに仙人語をなすを
そどもとも更に狐狸ハまんともとせんともいへども信ぜ
ハさる人の耳中に出ゆるハ信ぜハさまし人より
我耳中に躁しきハ耳鳴の他人の耳に出へざるが

ごとし又巫山伏八卦置に依れバさりてもさのごとし
称ん中に依れバ不正ありしゆゑしくたのしてらふと牽
受ぐく依れバありたふとこ術の巫山伏を人と依れバ
もとしハわたら称ど正しからざる蓋術より推量のあ
てがふを以くたふハ是又依れバあり夫易ハ天下の疑
と決断するものゆへ疑ごとんバたのむべきものとひくんず
のことひあるもれそうしてひと決するところ易ハ天理より（●八易さ）
おる所よして更に私意の推量と以くたふところ
ふあるど仰でハ天を欽俯して地を察し事くハ

物に至るまで唯これ常に陰陽五行に処して二
五の妙処を知れバ疑ひ不審なしといふべきなれバ
てなし故に易を知るものハ易を語らずとしるべし又
佛家の奇妙奇瑞に依るも皆己が意より依れるなり
仏神本尊画像木像土石金像を活法師の寓言より出
て化現と称し他を依らし己を依らし我医を示
復するのごとし陰陽五行の理不ありて依らざるなれ
脉理病症に依るもこれ比武名術家記して書と見
しれ医療の規格になし一なるありいかに周陽の事へ幻

術者ありて裸体に鉄炮を受ることを掛物にして
金子を多く取ける周防長門は鉄炮の名人多き
ところなれバ功をなさんと彼幻術者に挑まれて
多く掛物をとりて一人の幻術者と打合せ
なんなくして既に幻術者その処へ帰りきたらんと
を鉄炮打ける人々無念におもはしく思ひ指南
する師に語りて師の極意をのぞむ師辞退する
といへども大切なる乞望にやむことを得ずして幻術
者に立向ひたりしかれバあやまたずして打

かけ幻術者は空しくなりけり此師匠と
弟子とのてなみの差あることを見るべし弟子はひた
すら裸体を覗ひ師匠は脱置る衣服をねらへり
是猿引の船中にかくし居るとおなじ裸体は幻化
の体なり本体は衣服の中に居けり師此本をしりてなり
なり我医法内経に標本論あり病を治するに先
其本をとるむ然して本急なれバ先其本を治し
後なれども標を治し標急なれバ先標を治し然し
て後本を治し標本ともに急なれバ標本兼治して又

の幻術者の裸形は標なり衣服は本なり師は標なき知
らざる弟子は知らざるなり今の医は標本と論ずるは
少なり多くは裸形と覗なり

一医者發不發を議

或人安文問ていわく不学の医者は済てもやすし
また学医のしやらざるは如何答ていわく此方既に
丹亦子は論ずる丹亦子のいへるは不学の医は告これ
十人を殺せども僥倖あるのさいはひありて高貴
の名ある人を一人治するときはそれより也して流行出て
たやすく付学医は悉く十人を治すとも不仕合
なる名の人を不治にしてありしより名銭
落したるためし人の是一偏の見なり医のためを
思ふねへ天なり医と針を者何ぞとよりと好ぶるは
なし術追従馬鹿慇懃にして小田原の透頂香より
猶まさりべからず医者は人多くは嫌ふものなり或は口は
て律儀正當にて言葉少なるを流行せずして
人前蹤を知らぬものなり或はやらせんと貪るり仕
幽物店の古状箱の売買して弐壹分すべきさ

夜ハ内より門を叩させ昼ハ人雇して此辺ニ何がし
といふ医者有やとたづねさせなれハ七なり病家あまたハ
みな十なり七十なり後ろまでかゝる病の者の脚が痛ずりして
て尻りげしして去るを待つ程じゃものを人ゆるふさぎなり
ほべ儲上ゲ世の中ひかる薬物と云ぐすかふ人ふところ
ぶらつく押て薬なり火の車物除よハ業なれなり借
銭気多く何しやくの責ニあつく後ハ音なくして
皆の末ハ京糸崔あくりふりハて高貴なる医者
もありて世が中ふも丸めぐらりけて出るく丈帰が

しいてしふる医者がふてしもゆる度々して後ハ
大醫院法眼法印をか上るハ天下もひろく人の
中にもちやなるて医者の事ながら仏を同じて
なり石仏木仏の霊験あくなりして如しても
ときいへし元来本尊の仲奇妙不思議のあるぞや
うなし清水の観音大同年中田村丸の信仰ふ
よりてもの年三百年ハ昔沙法なし元暦の比盗
久系清が霊なんかて又たまりて後ハ兵乱
火災相続くて東山での時代より少くまじなりし

そのかハ音羽の瀧の音たえく舞臺より飛が行じ落
る田村堂の朽くちく淋りしに又そのかみの大歌集
清水坂のさつゑハ何でしぞやと皆観音のりやうさなり波
人のいささかなりとも城南ちのかハむりしを今とある
ありかかに三十四五年以前に一とせ城南ちのありとくいへ
しそ五歳肉を團らり人はちぞりせしハ何とかいふるぞや
むかし寛永年中のことありし小国何村とかやいへるところ
の百姓の家に或日夜更て戸をたたく者あり何者ぞ
といへバけしあるりかそ山焼のものを産せり味噌汁が

あしくバおくへしとて折ふし味噌汁鍋のありけるを土瓶
にとりておかしくこバかれくきらぬ翌日そのあたりの田
面に寒さを山焼の子を産てうしろへて夕ぐれなる物を
あり夜前おくへし土瓶をあきバさそへ伸びハなく
山焼の産せしをりしがまひ私むさらをけ用
臨月なりあやかりてやさしく産でさせなりなし
念じ夕さバ程なく安産しら隣家のだでかくに
山焼の御利生なく安産しさらくてちゆきしけ
またバ我むとろハいたく産月我がみハいたくなり

いつぞ山焼よ於誓やさんし件の田面まろび倡仰
しかりそれより疱瘡子目病耳聾腰ゞ膝なと
甫なりて山焼よ祈願しかり近郷ハ勿論遠村まて
受い家中老若男女貴賤上下ふ寄らず参物などし
あつまりて社を立るまもと立山焼堂と名付て昼夜
の群集ひとさし渡その近郷隣在ゟで詣けり
されバ古守ゟのなひていふあつこの起りぞ由来
をとらぞ孫させてきされバ彼山焼といひしハ是布の
家中の若党債少年の女と密通し勝く隠しおく

されバ女のあそべのもの越路にありけりそれをた
のまれて二人連ふて此所まで来りけるに走ちらに催
気付て件の田面ふて産前しあひちち当子を津
幡門といふ抜とて丈婦ハ越路のあそべのものを頼
みしに親兄弟しいふをあらぎと女の親しのぶちる
なりとたのみふ抱とりて於なりふ女のそのあされハ其村
ふて子を産し難苦ををと川く流せしといふより
女ちうしにくゝく越路ふもさつぼくでく上方
迄のかりし云ず上方の関所ふくく女を通さでつけ

されバ是非なくその邊にて女をころし殺し男
も自殺してふたりともなりけるし委細に雑路よりや
おそれハ彼山焼の産せし月日たがひなきれバそれより
此沙汰ひろがりてさそくしんさつりとやく山
焼堂もおのづから捨られしや物のとやかハ皆くの
ごとしあしかてとなれてしがひらきくるての山の
老雄りしこの里の野女の妄想の妙薬名ぞらしひて
人情のさまふしく学不学の差別なく一隆盛なる
唐日本しりふ同じてしなりけの拳原礼が医学修行

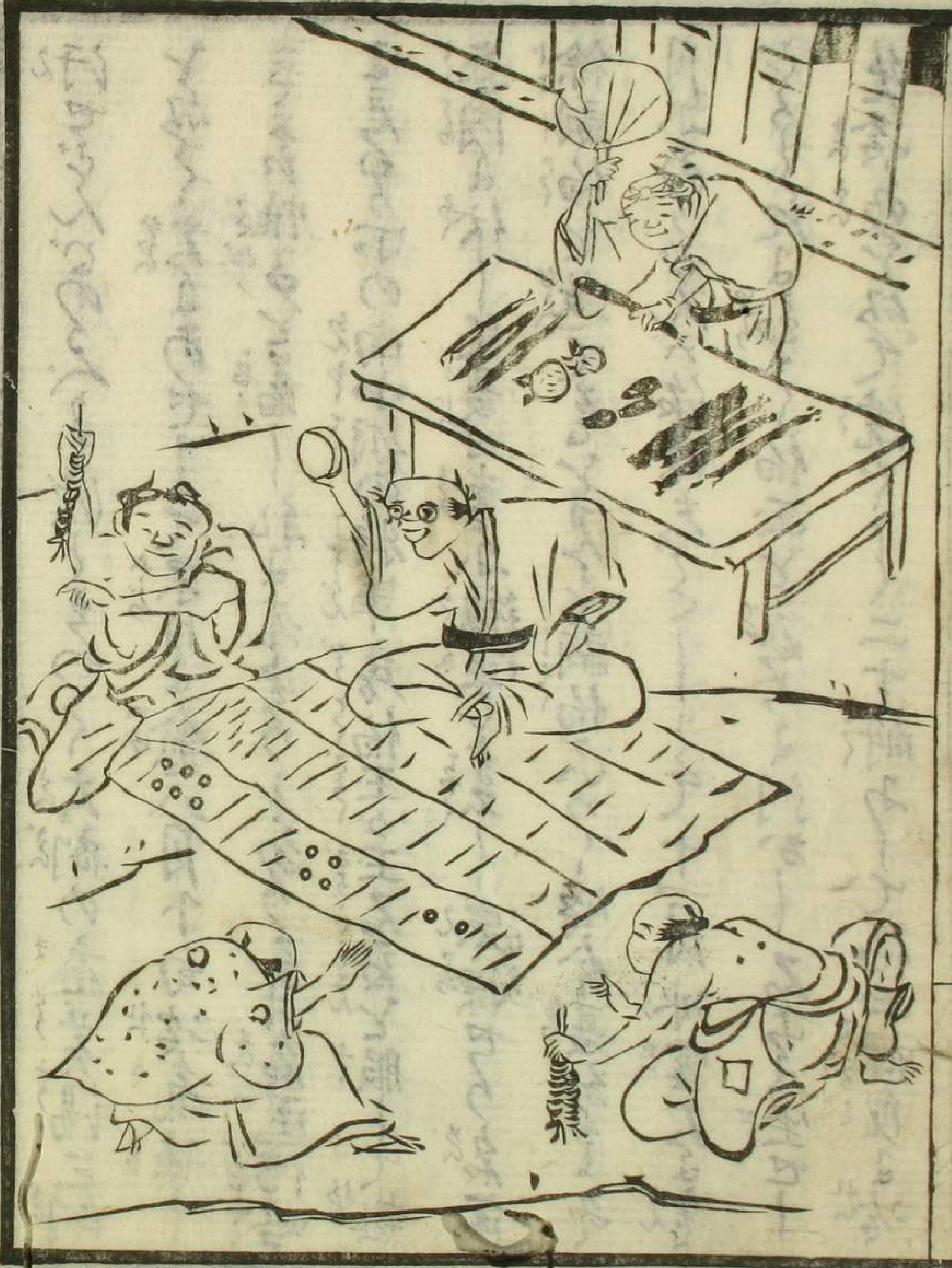
に諸國經營して揚州にいたりぬれバ人なづきたく古
そのりの一医者ありけるがさらぬか良医なるべし
と寄宿しけるに此医多くの薬れに薬をとして治
無に鉛を入てせんじくべしとのみの此かりけれバ原
礼不思議におもひ鉛の入しをりハ何とも薬方に
やと問ひしかバしかとや建中湯なり鉛一銭入と方書に
あるぞやと云つき此医者もふかく無文的なる飴と
いふ字を鉛としあやまりけるなり原礼是にて奥をさと
し終に丹溪の門に入しとなり建中湯ハ脾胃の中

気と腱にもろくさとうやく飴一銭目ハなり飴の字ハ
食へんに台の字なり鉛ハ金へんに㕣の字なり㕣
医者食篇と金篇と見ちがへ台と㕣と又見ちがへ放に
これらくすりなりさればこそ飴ハ温補のものにして脾
胃をやしなへ鉛ハ寒冷の物にして脾胃を害す字
とりちがへや由ありけり薬物の修治を知らざる淺ましさ
医者の大きなるハ奇妙なり我邦にもその
むかしの医者あり本瓜の和名をかけしくまでと知
もして字のまちがひさへありし刻ぐ胡瓜をさうりしすりこ

名にしへば胡瓜と本瓜と合点して五六月に多く胡
瓜を冬天に干暴収くくへて脚気の病に用しなり
孫に脚気には胡瓜を忌と知らずして甚に脚気に
本瓜を用ひなしと聞きしく本瓜をこそうりなく
おかへしてそはくなる程ぞとも大きなりして
くすりれ清楽とさし塞で飛脚のあしとも見ゆる
庸医を日本にも不学の医者のきなるハ大しへひ
なづくを経如何ともいひがくし学医のうづをきて鳴
ざるをまく如何ともいひがくし須年のてしなり上京

新町の端にて世にしられたる医者ありけるに丹
後屋の何がしといへる者の妻伏陰痼冷の症にて六月土
用中に夜眼ふとんにくるまり其上火桶を前におき屏風
障子を立まはし頭に綿入帽子をかぶりて耳目鼻ばかり
いだし胗脉をうくるに袖よりわづかに手をさし出す其外
身の冷ゆる事かぎりなし依て数医を更て療治
すれども少しも効なし時に六月下旬のころ
にいたりて彼気学の一医を招きけるにこれ伏陰固冷
の症なりといひて時六月なれども麻黄湯をもって発

汗せしめんとてはじめに麻黄湯二剤
をのませけるにかへって不日に癒八月下旬冷気涼しく
なりて帷子を着しけるとぞ是は名医伝略
にある所の南小朝の将軍房伯玉が五石散を服して熱
毒内に伏して夏月常に複衣を着し寒慄せり名医
徐嗣伯を邀てこれを見せしむ嗣伯がいはく時今夏なれども冬
月にあらざれば治療なりがたしとて十一月冰雪大に寒
ぎりしかるにまづ伯玉を庭上に引出し石上に坐せし
め冷水をもって澆ぐこと二十斛にして伯玉裸体に冷



水を澆がれて気絶せり家人眷属啼哭してこれを
掌て嗣伯杖をもつてしきりにひたすら水を澆ぐこと百斛
におよびて伯玉の背上彭々として烟たちて動かず俄然として
坐していふ熱さたへがたしと冷水を飲んとす嗣伯
水をあたへけるに一升にして病都て差ぬまた月をこえ
ずして撲草衣なしとなり彼貧賤の医者ふたりへ伯
玉ハ石薬を服して熱毒肉に伏したるを冬月冷水
をもつてこれを治し此医ハ陰毒肉に伏したるを夏月
麻黄湯の熱剤をもつてこれを治す伯玉と此婦をば

症ハ皆寃とおもひてしれじといへども其因ハじ
かぎりてしかも大〃に差ぬる奇なるかな学ばざる後生輩
恐るべし又未然に病をしりたる医あり數屋町通丸太
町のあたりに熊谷仲とて隠逸なる外科あり術において
は古人に恥ぢず強きども芸に驕て気随気侭なれ
て頑なり瘡毒癰疽を治すること奇妙なりといへども
一人一病を治するに備治料をさだめ元厳君平が賣卜
になぞらひて一人を治せし薬料のあがりハ又他の治
療をせずして小園碁を嗜て逸遊せり毎年二月初

午の時分を隣の人々にさそひて是も稲荷詣としけるが
人々みなさきに下の町伊勢屋の何がしといふ茶屋の床より
熊谷が僕ひし浮世の内に得意ありしが挨拶しけ
れば彼一言に茶屋をちかづきにし浮世なりし人々にいふやう
あの者ハ他に異なる大病ありしに今ハ浮世なる者の
いかく随分無病堅固なりしものとみへしがふとした
てかへりしたりしが七月盆ごろの比より彼茶屋煩ひだし
次第に大病となりて八月九月を経て救医を替て治
をとりへしかども更に効なし既に死すべき所一門眷属

へれどいふかぎりのぞみて諸医にとく施を頼て去ければ時
に彼ころの比稲荷詣の浮世にかし男のいひけるハ
外科なりといへども不思議なる手ある斎春といふ
のしありしなりかくせうきを問ひ見んがやとて熊
谷方へさそへば病人の形状をくはしくみればなん
為しあの者内瘤を病はいまだ治療の手がかりあらね
ばてとくせんとて彼男ともなひ来て形状を見診
脈してたとく為しと名乗りけ例の療治料銀三十枚
と定めて腰の下経より膏薬をおし大椎に張てそ夜

中にも病人惣身を痒がるべしかならず掻せべからず痒くまぬ極甚きときは絶気すべし其ときは独参湯を以て蘇香圓を用ゆべし此翔來るべしそして翌翔に至りて鍼して膿をとるべしまくさるものもありらへとつて何程も膿を拭ひならばよろしき事の物といへども他くは埒明ずして盥浴衣等の物とりかへさせ扨独参湯をせんじ盃にて件の張抹の膏薬をとれ針を刺まるれば膿天を衝て此者病床の前後丸太大雨の簷滴のごとし此とき独参湯を用ひて

元気をたすけ瘍膿とく滴り尽るをぬぐひ去其後惣身の内二三ヶ所押て病人いたむ所へ痛とふはいまだ膿のこりたりとて又右の針口に膏薬を付て夜にいたらば又々取るべしかならず如しむるるとも昨夜程にはあるべからず此翔来るべしとて悪き翔もなく来りて膿をとれば前日の三の一ほどにて至や膿なし病治したりとて去つもぬ秋病ものと春見ともしる未然に病因知りておそらく扁鵲が膳の一方の人をうしなひしかと抑かならず今とても

但州 湯嶋 山崎屋

莽蒼の中にかゝる奇術なんどもあり貧窶者乃
夏日ハ汗を發さんとて故に麻黄湯ハ夏日の禁薬
なりと柱に膠せざるの才圓機應變のたゝかひ庸医
の知るべき所ならず世人猫面鼻猴の時医を
笑ふところハ薬を服させる者ハ無眼なりとハ是此謂之
時に山の神なぞ称して又冀得無の一夫は篤を張海に
縄ぞかけるやうなる講談無くとてひさい偽を以て
とさる世の中に大切な病人ハ時医をかゝるなりとも
人の口を防ぐなるも先をやり医をかけらハならずたゞく学

医とても百人が百人いやしきものハあるべし一陽来復が
春物午後のりに外科の見そめしハ命のあるべきさ
一夫命なりとぞや時醫者の塵によるも一天命なりとぞ
や悉皆そなへの談義ハ女子の法界悋気じやし
このまゝるきバ冀得無閉口し

医者談義巻五終

医者談義後篇　近刻

寶暦九己卯七月

但馬城崎　山崎屋勘十郎

東都　三條小橋西　小田九郎衛門

皇都書林　高倉二條上ル町　林宗兵衛

二條柳馬場東へ入町　林伊兵衛

加州書林　金澤安江町　能登屋治助

但州湯嶋　中屋甚左衛門

但州湯嶋　中屋甚左衛門